



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パトロクロスの葬礼競技と『アイティオピス』
Author(s)	川崎, 義和; Kawasaki, Yoshikazu
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 72, 47-74
Issue Date	2019-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73284
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC72-3_Kawasaki.pdf



【論文】

パトロクロスの葬礼競技と『アイティオピス』

川 崎 義 和

『アイティオピス』⁽¹⁾の後半⁽²⁾に見られる一連の物語（即ち、アキレウスが友アンティロコスの殺害者メムノーンを倒した後パリスとアポローンによって殺され、その死骸をめぐる激しい闘いの後アキレウスの葬儀と競技会が催される）は、『イーリアス』のパトロクロスの出陣から葬礼競技に至るまでのストーリーと平行関係にあり、しかもこの両ストーリー間には細部に亘って類似点が少なくない⁽³⁾。これについては19世紀前半にトロイア戦をめぐる一群の英雄叙事詩（いわゆる「叙事詩圏」或いは「叙事詩の環」）に関する広範な研究を行った Welcker⁽⁴⁾によって詳細に分析されたが、その後特に20世紀半ば以降『イーリアス』がこの物語、或いは『イーリアス』以前に遡る古い同種の物語⁽⁵⁾から影響を受けたという見方⁽⁶⁾が Kakridis⁽⁷⁾、Pestalozzi⁽⁸⁾、Schadewaldt⁽⁹⁾、Kullmann⁽¹⁰⁾等の「新分析論者」（neoanalysts⁽¹¹⁾）によって精力的に論じられてきた。この学説は当初痛烈な批判を受けたものの、最近では広く受け入れられる方向に傾いている⁽¹²⁾。しかしながら、今日においても Burgess⁽¹³⁾、West⁽¹⁴⁾、Allan⁽¹⁵⁾、Davies等が反論を展開する一方、Dowden⁽¹⁶⁾、Currie⁽¹⁷⁾等によって支持され相変わらず賛否両論の議論が続いており、叙事詩圏の諸詩とホメロス詩の関係に関する Welcker 以来の対立する主な諸学説（統一論、分析論、口誦詩論）の研究史を背景に持つ複雑難解な問題の一つとなっている。

本稿では、これについて従来余り注目されなかった以下のような視点から再検討を試みることを目的としたい。第一章においては、何故パトロクロスの葬礼競技に『イーリアス』とは本来関係のない木馬の作戦に関わる人物が登場しているのかについて、クイントス・スミュルナイオスの作品を中心に典拠分析を行う。第二章においては、古代ギリシアの葬礼競技の古い風習や運動競技の発展・普及がパトロクロスの競技会の形成に及ぼしたと考えられる影響を考察・検討の主な対象とする。

I

『イーリアス』には矛盾する、或いは不自然な点や個所が多く見られる⁽¹⁸⁾が、第23巻のパ

トロクロスの葬礼競技も例外ではなく、奇異に感ずる箇所や詩句が少なくない。特に、競技の参加者はこの作品の代表的な登場人物であろうと予測されるが、その3分の1余りの5人（後述）は作品の流れには直接関係がない、或いは稀にしか現れないこともその一つである。しかも不思議なことに、この5人を含む競技出場者14人の中、ギリシア軍の総帥アガ멤ノーン及び木馬のストーリーでは既に死亡している2人（大アイアース、アンティロコス）を除く11人全員がクイントス・スミュルナイオス作『ポストホメーリカ』12.314-32の木馬の勇士のリストに現れる。以下の比較対照表は、こうした点に留意しながら表示したものである。

パトロクロスの葬礼競技の登場者 ⁽¹⁹⁾ (II. 23.257-897)	アキレウスの葬礼競技の登場者 ⁽¹⁹⁾ (Q.S. 4.115-595)	木馬の勇士のリスト (Q.S. 12.314-32)
Achilleus	(戦死)	(戦死)
Eumelos；戦車競走	Eumelos；戦車競走	Eumelos
Diomedes；戦車競走、武装試合	Diomedes；相撲 (=レスリング)	Diomedes
Menelaos；戦車競走	Menelaos；戦車競走	Menelaos
Antilochos；戦車競走、徒競走	(戦死)	(戦死)
Nestor	Nestor；弁論競技	
Meriones；戦車競走、弓術、槍投げ		Meriones
Phoinix（審判）	Phoinix	
Idomeneus	Idomeneus；拳闘	Idomeneus
小Aias；徒競走	小Aias；徒競走、弓術	小Aias
Sthenelos	Sthenelos；競馬	Sthenelos
Automedon		
Noemon		
Epeios；拳闘、鉄塊投げ	Epeios；拳闘	Epeios
Euryalos；拳闘	Euryalos；槍投げ	Euryalos
Aias；相撲、武装試合、鉄塊投げ	Aias；相撲、円盤投げ、（全力技）	(自害)
Odysseus；相撲、徒競走	Odysseus（負傷）	Odysseus
Polypoites；鉄塊投げ	Polypoites；戦車競走	Polypoites
Leonteus；鉄塊投げ		Leonteus
Teukros；弓術	Teukros；徒競走、弓術	Teukros
Agamemnon；槍投げ	Agamemnon；競馬	
Talthybios		
	Akamas；拳闘	Akamas
	Podaleirios	Podaleirios
	Agapenor；幅跳び	Agapenor
	Eurypylos；戦車競走	Eurypylos
	Thoas；戦車競走	Thoas
		その他、12人 ⁽²⁰⁾
計 22人	20人	30人
13/18 ≒ 72.2% ⁽²¹⁾	16/18 ≒ 88.9% ⁽²²⁾	
11/12 ⁽²³⁾	14/15 ⁽²⁴⁾	

パトロクロスの葬礼競技の登場者を登場順に左欄に配し、右にこれに比較対比する形で、クイントスの『ポストホメーリカ』に見られるアキレウスの葬礼競技の登場者を記し、その右の欄に『ポストホメーリカ』第12巻に列記されている木馬の勇士のリスト30人の中、いずれかの葬礼競技会に登場する18人の名を並べて記した。薄く塗りつぶした箇所はそれぞれの競技の参加者とその参加種目を示す。各列の下段には各競技会の登場者数、木馬の勇士の割合等の集計結果を記した。

競技の登場者に対する木馬の勇士の割合は、アキレウスの競技会の場合、後の木馬のストーリーを考慮してか、かなり高い比率、88.9%に上る。対して、パトロクロスの競技の場合はその必要がないにもかかわらず、登場者22人の中老ネストール及び死亡者3人を除く18人中13人が木馬のリストに含まれ、表のように高い比率72.2%（約4分の3）を示す。競技の参加者については、どちらも死亡者と総帥アガメムノーン、アキレウスの葬礼競技の場合には更に老ネストールを除くと、驚くべきことに参加者全員が木馬の勇士に含まれる。クイントスの場合は、木馬の物語の準備の必要性から当然考えられるが、『イーリアス』については詩人が木馬の段を準備することは考え難い。では、アガメムノーン等を除くパトロクロスの葬礼競技の参加者11人は何故全て『ポストホメーリカ』の木馬の勇士に含まれるのか。単なる偶然であったか。これについて、以下に過去の研究を振り返りつつ検討を試みたい。

クイントスはアキレウスの葬礼競技を描写する際に、『イーリアス』23巻に依拠するところが大きであったと言われる⁽²⁵⁾が、後述のように競技の順序は全く異なり、競技の参加者が一致するのは上の表に見られるように、それぞれの競技会の登場者の約半数の10人（エウメーロス、ディオメーデース、メネラーオス等）に過ぎない点から、必ずしもそうとは断言できない。更に上記の表が示すように、この一致する競技参加者10人の中4人の参加種目が全く異なり、完全に一致するのは僅かに2人（エウメーロス、メネラーオス）である点からもクイントスが用いた主な典拠が『イーリアス』23巻であったとは言い難い。

更に詳しく検討するために、パトロクロスの葬礼競技の登場者（塗りつぶしは競技の参加者）と「船揃い」の段におけるその言及箇所、右に『ポストホメーリカ』を含む幾つかの作品に言及されている木馬の勇士の名をアルファベット順に比較対比した表を以下に示す。

パトロクロスの 葬礼競技の登場 者、22人 (<i>Il.</i> 23.257-897)	ギリシア勢の「船 揃い」における言 及箇所 (<i>Il.</i> 2.494 -779)	木馬の勇士 (<i>Od.</i> 4.271-89, 8.499-520, 11. 523-32)	木馬の勇士 (<i>Verg. Aen.</i> 2. 261-4)	木馬の勇士 (<i>Paus.</i> 1.23.8)	木馬の勇士 30人 (<i>Q.S.</i> 12. 314-32)
Achilleus	685, 688, 769				
Agamemnon	576, 612, 772				
	609				Agapenor
Aias	528, 557, 768				
小Aias	527				小Aias

			Acamas	Akamas	Akamas
	620				Amphimachos
		Antiklos			Antiklos
Antilochos					
					Antimachos
Automedon					
				Demophon	Demophoon
Diomedes	563, 567	Diomedes			Diomedes
Epeios		Epeios	Epeos		Epeios
Eumelos	714, 764				Eumelos
Euryalos	565				Euryalos
					Eurymachos
	736				Eurypylos
	512				Ialmenos
Idomeneus	645, 650				Idomeneus
Leonteus	745				Leonteus
	732		Machaon		
	627				Meges
Menelaos	586	Menelaos	Menelaus		Menelaos
	552			Menestheus	Menestheus
Meriones	651				Meriones
		Neoptolemos	Neoptolemus		Neoptolemos
Noemon					
Nestor	555, 601				
Odysseus	631, 636	Odysseus	Vlixes		Odysseus
	718, 725				Philoktetes
Phoinix					
	732				Podaleirios
Polypoites	740				Polypoites
Sthenelos	564		Sthenelus		Sthenelos
Talhybios					
Teukros				Teukros	Teukros
	620				Thalpios
			Thessandrus		
	638		Thoas		Thoas
					Thrasymedes

1963年にKeydell⁽²⁶⁾は、木馬の勇士の名前の大部分は『イーリアス』の「船揃い」から借用されたと見做し、その6年後Vian⁽²⁷⁾はBudé版の『ポストホメーリカ』第12巻の解題において、勇士のメンバーの中で『ポストホメーリカ』の他の個所では現れない3人（即ち、メネステウス、イアルメノス、タルピオス）の名は、この「船揃い」からでたらめに（« au hasard »）

選ばれたと述べている。しかしながら、以下の幾つかの点から必ずしもそう判断する理由はないと思われる。

まず上の表が示すように、木馬の勇士のリスト30人中『イーリアス』2巻の「船揃い」に言及されていない名は、アカマース、アンティクロス、アンティマコス、デーモポーン、エペイオス、エウリュマコス、ネオプトレモス、テウクロス、トラシメデーデスの9人に上る。この中『イーリアス』にも『オデュッセイア』にも見られない勇士は、アンティマコス、エウリュマコス（『オデュッセイア』ではペーネロペイアの求婚者たちの一人として登場する）、アカマース、デーモポーンの4人のみであり、後者2人はテーセウスの二子としてパウサニアス『ギリシア案内記』1.23.8（木馬の勇士として言及）、『小イーリアス』断片20⁽²⁸⁾、『イーリオン陥落』の梗概⁽²⁹⁾に触れられている。またアカマースは上の表に示すように、ウェルギリウスの『エネーイス』2.262に木馬の勇士として言及されており、写本上誤りの可能性があるアンティマコス及びエウリュマコス⁽³⁰⁾を除くこのリストの28人⁽³¹⁾は全てホメロス詩（「船揃い」を含む）、或いはトロイア叙事詩圏詩に現れることから、トロイア戦を扱った叙事詩群のtraditionalなメンバーであった可能性が高い⁽³²⁾。従って、リストの大半（21人）が『イーリアス』の「船揃い」から借用されたというKeydellの見方は十分な説明に欠けるとと思われる。

むしろ次の点から、古代において木馬の伝承に関してかなり綿密な調査研究が行われていたことはある程度確かであろう。一つには、木馬の勇士の収容人員について12人、50人の他、ステーシクロスと『小イーリアス』によれば、それぞれ100人、3000人と伝えられており⁽³³⁾、第二に『イーリオン陥落』断片2⁽³⁴⁾の写本の一文字aの削除によりArctinusの名が1957年に復元されている。それ故、木馬の収容人員が古代に何らかの形で記録されていたことは明らかであり、またこの断片からアルクティーンノスが『イーリオン陥落』の作者であったことは否定できず、後で触れるように一般にトロイア叙事詩圏詩の作者帰属の多くが後代の作り事に過ぎないという批判は疑わしい。

第三に、Campbellによる『ポストホメーリカ』第12巻の注釈書⁽³⁵⁾は、30人⁽³⁶⁾の木馬の勇士が僅か10数行のリストに集中して列挙され、ごく単調で短い、このリストに用いられているepithetsの分析から判断して、このリストが完全に或いは一部が恐らく簡単な散文の記録（‘prose record’）または注解に基づいて作成されたであろうと結論している⁽³⁷⁾点が挙げられる。Campbellによれば、その理由は名前に付されているepithetsとしてκρατερός及び‘godlike’（即ち、ἀντίθεος, ἰσόθεος, θεοείκελος）、更にἐρίθυμος, ὀβριμόθυμοςが見られるが、前者の二つ（つまり、κρατερόςと‘godlike’を意味するepithets）はしばしば使用され、後者の二つはクイントスが他の個所で頻繁に使用し、特に帝政期に好まれたepithetsである点⁽³⁸⁾にある。従って、クイントスが挙げる木馬の勇士はその大半が「船揃い」から選ばれたのではなく、或る程度信頼性のある伝承に基づくと見る方がむしろ真実により近いと思われる。もちろん、木馬

の勇士のメンバーに関する伝承は叙事詩のみならず、様々な抒情詩や悲劇等に由来する可能性もあるとはいえ、古い叙事詩作品に最終的に遡り、それが後代にtraditionalな木馬のメンバーとして伝えられたかも知れない。

Kullmann⁽³⁹⁾によれば、クイントスが木馬の勇士のリストを作成する際に、『イーリアス』の「船揃い」と並んで、最終的にレスケースの作品と伝えられる『小イーリアス』に遡る資料を利用したという。しかし『イーリオン陥落』と同様、木馬の伝説を歌う最古の叙事詩の一つであるこの『小イーリアス』は、エペイオスが木馬を建造し勇士たちがこれに乗り込んだ後トロイア人が木馬を城市の中へ入れ、そして勝利したものと思い込んだトロイア人が祝宴を張るに至るまでを描く⁽⁴⁰⁾作品であり、木馬の物語の最初の部分を語るだけで未だ勇士たちの戦闘場面には触れていない。

これに対して『イーリオン陥落』の梗概⁽⁴¹⁾では、シノーがテネドス島に待機中のギリシア軍にのろしで合図を送り軍が木馬の勇士たちと合流した後、共にトロイアを陥落させた模様が描写されており、メンバーの詳細に触れることが多かったと思われる。しかも、先述のアポロドーロス⁽⁴²⁾によれば、『小イーリアス』の木馬の勇士の数が3000人であったとあり、3000人の名（但し、訂正読みがある）を一々述べることはあり得ない。こうした点から、クイントスが依拠した神話集や神話事典の資料の中に『イーリオン陥落』に遡る何らかの伝承素材が含まれていた可能性は十分に考えられる。

次に、『イーリアス』の中で目立った活躍をしないパトロクロスの葬礼競技の参加者5人について『ポストホメーリカ』の言及箇所と比較対照した表を以下に記す。

	II の「船揃い」	II のパトロクロスの葬礼競技	II の他の箇所	Q.S. のアキレウスの葬礼競技	Q.S. の木馬の段	Q.S. の他の箇所
Epeios		23.665, 689, 694, 838, 839	(20.30c : 異読)	4.324, 329, 337, 356, 395	12.81, 108, 119, 134, 138, 151, 157, 329, 424, 13.41, 51	14.88
Eumelos	2.714, 764	23.288, 354, 380, 481, 559, 565		4.503, 522	12.324	
Euryalos	2.565	23.677	6.20	4.473	12.324	8.306, 11.108
Polypoites	2.740	23.836, 844, 848	6.29, 12, 129, 182	4.503	12.318	1.291
Leonteus	2.745	23.837, 841	12.130, 188		12.323	7.484

この表が示すように、エペイオスを除く4人については、いずれも言及の頻度は余り大差がない。因みに、クイントスが『イーリアス』のパトロクロスの葬礼競技から『イーリアス』の主要人物のみならず、これら5人をも借用しアキレウスの葬礼競技会に出場させ、更に木馬の勇

士のリストに入れ込んだという可能性は全くないわけではない。これについては従来触れられることはなかったと思われるが、これまでの精査検討からその可能性は低く、クイントスが本来木馬のストーリーとは関係のないパトロクロスの葬礼競技の出場者を理由もなく木馬の勇士のリストに敢えて載せることはないであろう。

ところで、上の表のメンバーについて『ノストイ』⁽⁴³⁾によればラピタイ族の二人、ポリュポイテースとレオンテウスはトロイア戦後カルカースの一行と共にコロポーンに至り、当地で死去した予言者ティレシアースを葬った。この二人は『イーリアス』では、上の表に見られるように殆ど常に共に現れ、古い伝承に属すると見られる⁽⁴⁴⁾。エウメーロスについても「船揃い」以外には唯一パトロクロスの葬礼競技に現れるに過ぎず、この競技会の戦車競走では最下位となるが、アキレウスから第二位の賞品を受けることになった⁽⁴⁵⁾。アポロドーロスの『摘要』⁽⁴⁶⁾によれば、アキレウスの葬礼競技の戦車競走において優勝し、Kullmann⁽⁴⁷⁾が述べるように恐らく『アイティオピス』では彼の優勝が語られていたと推定される。加えて、アポロドーロスの『ピブリオテーカー』⁽⁴⁸⁾ではヘレネーの求婚者の一人とされている点からも『イーリアス』以前のtraditionalな人物であったことは略確かである。エウリュアロスについても、同じくアポロドーロスによれば『エピゴノイ』のテーバイ攻め⁽⁴⁹⁾の他、アルゴナウタイの遠征にも参加し⁽⁵⁰⁾、ギリシア神話伝説の古層に属する人物⁽⁵¹⁾である。もちろん、エペイオスは「船揃い」には言及されていないが、言うまでもなく『オデュッセイア』以降木馬の建造者としてよく知られている。このように見てくると、『ポストホメーリカ』の木馬の段は、

12.306–7 τούς μοι νῦν καθ' ἕκαστον ἀνειρομένῳ σάφα Μοῦσαι
ἔσπεθ', ὅσοι κατέβησαν ἔσω πολυχανδέος ἵππου·

「それではさあ、ムーサたちよ、問いかける私に明瞭に

巨大な（木）馬の中へ乗り込んだ者すべてを、一人ずつ告げたまえ。」

から始まるが、前述のKeydellが述べるように314行以降の乗組員の名の大半が『イーリアス』の「船揃い」から（何の理由もなく）選ばれたと見做す必要はなく、先述のように『イーリアス』の葬礼競技会の参加者14人中死亡者2人及び総帥アガメムノーンを除く11人が全てクイントスの木馬の勇士のリストに現れるのは単なる偶然ではなかったことは、恐らく明らかであろう。言うまでもなく、パトロクロスの葬礼競技の詩人は様々な古い伝承素材（例えば、『イーリアス』23.679–80のオイディプース王の葬礼競技）を熟知していたと推測されるが、特に競技会の素材として木馬の作戦に関わる或る伝承に依拠或いは借用したと考えられる。パトロクロスの葬礼競技の拳闘、鉄塊投げにおいて木馬の建造者エペイオスの対戦相手がそれぞれ、『イーリアス』では稀にしか現れないエウリュアロス、ポリュポイテース及びレオンテウスである点も、このことを端的に示していると思われる。

以上のように、このリストの殆ど全てがtraditionalな木馬の勇士であったと考えられ、恐ら

く『イーリアス』の詩人はパトロクロスの葬礼競技を描く際に、木馬の物語に深く関わる伝承を利用或いは借用したと結論できるかと思われる。では、詩人が依拠したこの伝承は何であったか。具体的には新分析論者たちが論ずるように『アイティオピス』、または『イーリアス』以前の或る古詩（想定上の『メムノーン詩』）に由来するのか。以下、この葬礼競技形成の背後にある時代背景や古代ギリシアの運動競技の発達・普及等をも視野に入れ、こうした点について検討して行きたい。

II

先ず問題とすべきは、アキレウスとパトロクロスの葬礼競技の先後関係であるが、これに関連して一部の新分析論者たちが主張するように、パトロクロスは元来『イーリアス』のために作られた人物であったという見方がある⁽⁵²⁾。事実、奇妙にも彼はアキレウスの無二の親友として『イーリアス』において中心的役割を果たすにもかかわらず、「船揃い」⁽⁵³⁾に言及されることはない⁽⁵⁴⁾。

これに対して、Janko⁽⁵⁵⁾は『イーリアス』1.307においてパトロクロスが初めて言及されるが、その名は直接に挙げられることはなく、「メノイティオスの子」として、即ち聴衆には既によく知られた人物として触れられ、またパトロクロスには幾つかの古いepithets（例えば、ἵππευς「騎士」）が使われる点、更にアキレウスの父ペーレウスとパトロクロスの父の血縁関係に関する伝承等、多数の根拠を挙げてtraditionalな人物であることを論じている。とはいえ、パトロクロスの葬礼競技については、新分析論の最近の反論者の一人であるBurgess⁽⁵⁶⁾ですら『イーリアス』の詩人のinvention（創意）によるという見解に傾いている。というのも葬礼競技は、例えば戦死者の遺体をめぐる戦闘と同様typicalなモチーフの一つであるが、パトロクロスの葬礼競技がアキレウスの葬礼競技よりも古いと判断するに足りる十分な理由が見られないからである。しかも、パトロクロスのために身分不相応とも言うべき盛大な葬儀と競技会が執り行われることは考え難く、不自然な感は否めない。恐らくはアキレウスのような英雄、或いは一国の王を想定しなければあり得ないと見る方が自然な見方と思われる。このことは、以下の葬儀から競技会への移行個所に端的に窺える。

II 23.257-8 χεύαντες δὲ τὸ σῆμα πάλιν κίον. αὐτὰρ Ἀχιλλεύς
αὐτοῦ λαὸν ἔρυκε καὶ ἵζανεν εὐρὺν ἀγῶνα,
「奥津城を積み終えて、みな帰ろうとしたのをアキレウスは、
その儘そこに人らを引き留め、広い集座を設けてから」

この257行に見られるκίονは通例アオリスト形⁽⁵⁷⁾とされ、「彼らは立ち去った」と解されるが、

ギリシア勢は未だ去ってはいず、このままでは移行が不完全であるため、これをアオリスト形或いは未完了過去形と見るべきか、議論がある⁽⁵⁸⁾。いずれにしても、アキレウスがギリシア勢を引き留めたことから、葬儀後陣屋に戻ろうとするギリシア軍にはパトロクロスのために競技会を催す計画がなかったことは明らかであり、Wilamowitz等⁽⁵⁹⁾が述べるようにこの競技会は後で加えられた、即ちinterpolationの可能性が高いと言わなければならない。897行の第23巻が、『イーリアス』の中で第5巻（909行）に次いで最も長い巻である点もこれを示唆し、第23巻850-83の弓術の試合もそのことを物語っていると思われる。鳩を射た射手が第一位に、鳩を結わえた細い紐を射た射手は第二位と予告され、実際にテウクロスが鳩を射損じこの不可能に近い至難の業に対して第二位の賞品を得たが、この描写は奇妙⁽⁶⁰⁾と言う他はない。これについてWilamowitz⁽⁶¹⁾は後述のペリアースの葬礼競技を手本として詩人が不器用に模倣したことによると説明している。とはいえ、アキレウスの葬礼競技の弓術試合に勝利した⁽⁶²⁾テウクロスが『イーリアス』では敗者となっていることから、むしろアキレウスの葬礼競技に由来すると考えられる。前述したようにアキレウスの葬礼競技の戦車競走に出場し優勝したエウメーロスがパトロクロスの葬礼競技においても同じく戦車競技に出場し、事故により最下位の5位に落とされたが、この場合も詩人の意図的改変によるものであろう。

ここで更に注目すべきは、Chantraine-Goubeが示す『イーリアス』23巻の言語及び文体面の分析結果⁽⁶³⁾、即ちこの巻が古風ではない新しい特徴 « traits récents » を強く示し、かつ他の巻とは離れた位置にあるという結論である。つまり、この第23巻（葬儀場面を含む）に固有な色彩を与えている多岐にわたる数多くの特色ある表現、例えば語形や意味のhapax、第23巻に特有な単語や表現、また幾つかの巻、特に第10巻及び第24巻と同様『オデュッセイア』に特徴的な定型句、定型表現、単語、例えば『イーリアス』23.10 τεταρπώμεσθα γόοιο (= 98, cf. 24.513 γόοιο τετάρπετο), 72 εἶδωλα καμώντων (= *Od.* 11.476, 24.14), 74 εὐρυπυλὲς Ἴτιδος δῶ (= *Od.* 11.571), 361 ἀληθείην (= 24.407, *Od.* 7.297, 11.571, etc.) が頻出すること、更に冠詞の用い方等々が詳細に分析されており、こうした点からもinterpolation⁽⁶⁴⁾の可能性は高いと思われる。

ところで、現存のパトロクロスの葬礼競技は戦車競技に始まり、重要度が減少する順序となっている。これに対して『ポストホメーリカ』の競技は徒競走に始まり馬術競技に終わるが、Willis⁽⁶⁵⁾はこの順序が、『イーリアス』23巻よりも古い段階の伝統的な叙事詩の葬礼競技の描写における種目の順序に由来するとし、後述のように前600年頃の「キュプセロスの箱」に見られるペリアースの葬礼競技の順序もこれを反映していると解したが、その論拠はVian⁽⁶⁶⁾が一部強く批判しているように十分とは思われない。古代ギリシアの祭典競技会等のプログラムやスケジュールについては不明な点が多い。特に資料が比較的恵まれたオリュンピア競技についても例外ではなく、最近のLeeによる精密な研究があるが、自ら述べているように拠り所とすべき情報が余りに乏しいと言わなければならない⁽⁶⁷⁾。ましてやホメーロスの生きていたと想

定される時代や神話時代の競技の順序やプログラムについては不明としか言えない状況にある。

とはいえ、クイントスの競技と古代オリュンピア競技会の優勝者リストの順序が或る程度 („ziemlich genau“!) 似ている点がKeydell⁽⁶⁸⁾によって指摘されている。もちろん、このリストの順序が実際に催された競技の順序であったとは限らないが、クイントスは当時入手できたこの種の記録や知識を一部参考にする⁽⁶⁹⁾ことによって、アキレウスの葬礼競技会の種目やその順序を決定したとも考えられる⁽⁷⁰⁾。

この順序について、アポロドーロスの『摘要』⁽⁷¹⁾に記載されているアキレウスの葬礼競技の順序(戦車競走・徒競走・円盤投げ・弓術)は、種目が網羅されていないかも知れないが、『イーリアス』23巻に見られる8種目の半数(4種目)の順序と一致する。因みに、同じ『摘要』⁽⁷²⁾が挙げるパトロクロスの葬礼競技の3種目の順序(戦車競技・拳闘・レスリング)も種目は大半省略されているけれども、『イーリアス』23巻と一致する。Vianや最近の新分析論の反論者たち⁽⁷³⁾に従えば、この要約は『アイティオピス』に直接由来するとされる。もちろん、『アイティオピス』よりも『イーリアス』が古いという観点からの判断によるわけだが、ギリシアの葬礼競技の慣習やスポーツ競技等から考察・検討を加えれば、むしろ逆の見方がより真に近いと思われる。

古代の伝承によれば、アキレウスの葬礼競技は『オデュッセイア』24巻に歌われているように母テティス⁽⁷⁴⁾が主催したが、他方『アイティオピス』の梗概に述べられているようにギリシア軍⁽⁷⁵⁾が行ったという伝承もあり、二通りに分かれる。ギリシアの葬礼競技の風習は古く⁽⁷⁶⁾、ホメーロスは繰り返し触れており、一例を挙げると『イーリアス』23.630-1においてネストール自らアマリュンケウス王の葬儀の折に王の子供たちが催した競技会に参加し、他方ヘーシオドスも『労働と日々』654-6において、アンピダマースの子供たちが父のために催した葬礼競技に自ら参加したことを語っている。Roller⁽⁷⁷⁾によれば、このヘーシオドスの事例に加えて、アテーナイのアクロポリスやデルポイより出土した競技会の賞品と見られる8個の青銅製の釜や鉢(前7世紀～前5世紀前半)及びアッティカ出土の3個の大理石製円盤(前6世紀)⁽⁷⁸⁾は、私人(‘private citizens’)のために葬礼競技を催す慣習があり、この慣習が前5世紀初期まで続いていたことを示唆し、更にこのデルポイ出土の釜(レバース)の一つに記されている碑銘から⁽⁷⁹⁾家族のメンバーである父親が亡き息子のために競技を催したことが推測される。

確かに、こうした例から『オデュッセイア』24巻のように母親テティスのような家族の一人が戦死した子のために競技を行うことは、別段奇異ではないと考えられるが、Rohde⁽⁸⁰⁾が論ずるように故国から遠く離れた遠方の地では戦死者の遺骨が持ち帰られることはなく、戦死した地に埋められるのが通例であった。とすれば、アキレウスの場合には家族ではなく、後に戦没者のためにアテーナイ等で公に行われた競技の行事(即ち、ἀγῶνες ἐπιτάφιοι)⁽⁸¹⁾のように、公式に軍隊が執り行ったという伝承の方が恐らく元来の形であり、母テティス主催のversionは二次的に派生したものと考えられる。軍隊ではなく女神を競技会の主催者とした裏には、葬

儀とそれに付随する競技会が通例の戦士ではない半神アキレウスに相応しく盛大に行われたことを強調する詩人の意図があったことは疑いない。親友が競技会を催したというパトロクロスの競技も同様に二次的に派生したと見る方が自然な見方であろう⁽⁸²⁾。恐らく『アイティオピス』に伝えられていたアキレウスの葬礼競技の方がパトロクロスの競技に先行し、従って後者の詩人が『アイティオピス』の葬礼競技を利用したと解する方が妥当な判断かと思われる。

このことは、パトロクロスの葬礼競技の場面に後のストーリーである『アイティオピス』等を予め示していると考えられるエピソードが幾つか見られる点からも示唆される。例えば、大アイアースとオデュッセウスのレスリングの試合は『アイティオピス』の最後に語られているアキレウスの武具をめぐる争い⁽⁸³⁾を予示し、更にWilamowitz⁽⁸⁴⁾が示唆しているように、この競技の中で語られている小アイアースに対する敵意のある人物描写 (cf. *Il.* 23.473, 483-4) とアテーナーによる彼の敗北は、『イーリオン陥落』におけるカッサンドラーに対する暴行とアテーナー像への不敬行為⁽⁸⁵⁾を予示すると考えられる。

ここで、『アイティオピス』及び『イーリオン陥落』の作者とされるアルクティーノスについて触れておくと、古代の年代考証⁽⁸⁶⁾によれば前8世紀の詩人であり、前1世紀の史家ディオニューソス⁽⁸⁷⁾は当時知られた最古の詩人であると伝えている。一般にトロイア叙事詩圏詩に属する詩の作者帰属の多くは、今日でもBurgess⁽⁸⁸⁾のように根拠のない当て推量 (‘guesswork’) と見做す論者もいる一方、Kullmann⁽⁸⁹⁾のようにこのアルクティーノスの2作品がかつては一叙事詩の二つの部分であったという可能性を示唆する見解も見られ意見が対立しているが、いずれにしても前述のように『イーリオン陥落』がアルクティーノスの作品であったことを疑う必要はないと思われる。トロイア叙事詩圏の諸詩の年代については、古代では前8世紀頃に、今日ではしばしば前6世紀に置かれる⁽⁹⁰⁾が、Burgess⁽⁹¹⁾も述べるように、主に120行ばかりの断片の言語分析による推測であって、十分なevidenceに基づくとは言い難く⁽⁹²⁾、必ずしも叙事詩圏詩、中でも問題の『アイティオピス』や『イーリオン陥落』を後代の作品であったとは断定できない。

こうした従来の限界のある言語学的分析から壺絵等の美術作品に目を転ずると、『アイティオピス』及び『イーリオン陥落』の中心的題材である後述のアキレウスの遺体を運ぶ大アイアースのエピソードや木馬のストーリーは古く前8世紀末頃から、ペンテシレイアとアキレウスの戦闘、大アイアースの自害は前700年頃或いは前7世紀初め頃から現れる⁽⁹³⁾。ところが、『イーリアス』を題材とする美術作品は漸く前630年頃から現れる⁽⁹⁴⁾ことは既に古代美術史家等が指摘している⁽⁹⁵⁾通りである。もちろん、artから作品年代を論ずることは常に不確かさを伴うとはいえ、アルカイック時代にホメロス詩は余り知られていず、トロイア叙事詩圏の詩の素材となる物語は古くから広く愛好されていたが、徐々にホメロス詩の方が人気を得るようになったというBurgess⁽⁹⁶⁾の主張は些か無理があると言わなければならない。

しかし、何故詩人は余り重要ではないパトロクロスのために第23巻の大半 (641行) を彼の

葬礼競技の描写に費やし、しかもその3分の2近く（391行）を戦車競走の描写に当てたのである。これについては前6世紀のアテーナイに目を向けるとヒントが得られるかも知れない。

アテーナイでは前696年以降オリュンピア競技会の優勝者が現れ⁽⁹⁷⁾、前594年にソローンは一連の改革を断行すると共に社会的に混乱の時期にあったにもかかわらず、オリュンピア及びイストミア競技会の優勝者に賞金を与える法を恐らく成文化した⁽⁹⁸⁾。この頃アテーナイでは運動競技への関心が一層高まり、前6世紀前半以降、神話・伝説の競技よりも実際の運動競技の模様を示す壺絵が増加するが、中でもこの古い時期の黒絵式陶器は馬や戦車の絵柄を描くのが特徴であった。この傾向は前4世紀までの間に運動競技一般のシーンを描く赤絵式陶器画へと大きく変化して行く⁽⁹⁹⁾。アテーナイの市民中心の運動競技⁽¹⁰⁰⁾は前6世紀のパンアテーナイア祭の発展と共に始まったとKyle⁽¹⁰¹⁾は述べるが、馬術競技、中でも戦車競技はこの時期においても競技会の花形として相変わらず一般市民のみならず、特に貴族層や富裕層の間でも人気の的であったことは上述の黒絵式陶器が示す通りである。この競技は相当の費用を要し王族や貴族等の富裕者の特権的種目であって、アテーナイにおいて記録に残る馬術競技者は漸く前592年のオリュンピア競技会優勝者であるアテーナイの名門貴族出身のアルクメオーンに始まる⁽¹⁰²⁾。

パトロクロスの葬礼競技を描くアッティカの黒絵式陶器画2点も当時の戦車競技の人気を反映している。一つはソピロス（Sophilos）による前580–570年頃の酒杯*kylix*の破片⁽¹⁰³⁾、もう一つは前570年頃の有名なフランソア（François）の壺（クラテール）⁽¹⁰⁴⁾である。但し、『イーリアス』23巻の戦車競走の参加者は、エウメーロス、ディオメーデース、メネラーオス、アンティロコス、メーリオネースの5人であるが、優勝者ディオメーデース以外はこのフランソアの壺絵には含まれない。通例画工の描くシーンとその題材となるホメーロス詩の描写が異なるケースが多く、美術史家を悩ませているが、これもその一例であり、一般に画工が知らなかった⁽¹⁰⁵⁾、忘れた、間違えたと思われる⁽¹⁰⁶⁾。とはいえ、ソピロスの酒杯に見られる画題「パトロクロスの競技」（Πατροκλης: Ατλα）はこの競技会のversionが当時よく知られていたことを明示し、従って略同じ時代のフランソアの壺絵師クレイティアース（Kleitias）がこの競技会について知らなかった筈はなく、この画工の記憶の間違いに帰することも難しい。実際に、その後間もなく制作された前560年頃の壺絵⁽¹⁰⁷⁾に拳闘の2人、トレーナー（レフェリー？）、レスリングの2人、これを中止させようとするアキレウス（？）、その後ろに徒競走者の顎鬚のないアンティロコス（？）と2人の走者、賞品の鼎がこの順に描かれており、それぞれ『イーリアス』の第2～第4の競技（23.653–798）に相当し、壺絵制作当時既に23巻の少なくともこの3種目が知られていたことを窺わせる。

因みに、ペリアースの葬礼競技⁽¹⁰⁸⁾についてもパトロクロスの葬礼競技と共通する特徴が少なくない。即ち、(1) 題材が恐らく文学作品に由来し⁽¹⁰⁹⁾、(2) これを描く陶器画が前6世紀前半に集中し、かつ (3) 比較的短期間（前6世紀前半）しかポピュラーな題材とはならなかった、また (4) 壺絵の間に絵柄の細部がそれぞれ異なる⁽¹¹⁰⁾点である。最後の特徴については、特に

ペリアースの葬礼競技の場合、これを描く壺絵等は多数に上るが絵柄が互いに異なる。更に特記すべきは誰のための葬礼競技かが知られるのはこの2例に過ぎない⁽¹¹¹⁾ことである。

このペリアースの葬礼競技から判断すると、壺絵師は先行の文学作品やartに余りこだわることなく創作したと見られる。この前6世紀は競技祭が各地に出現した時代であり、特に前580年代及び前570年代にはオリュンピア競技会を模範としてピューティア、イストミア、ネメアの3大競技会⁽¹¹²⁾が再編成された。こうした当時の競技熱が文学作品を新たに生み出す一方、壺絵師たちの創作の一要因となったと考えられる⁽¹¹³⁾。

フランソア壺の両取手に描かれているエピソード、即ち大アイアースがアキレウスの遺体を運ぶシーンは、『アイティオピス』や古く前8世紀末の壺絵に見られ、West⁽¹¹⁴⁾が推測するようにその後のエピソードであるアキレウスの葬礼競技が（恐らくは韻文の形で）壺絵師クレイティアースに知られていなかったとは考え難い。しかも、前580-570年頃の画工ソピロスとクレイティアースが二人ともアキレウスの葬礼競技ではなく、むしろパトロクロスのそれを画題として選んだことは、当時のアテーナイでは『イーリアス』の方が高い人気を得、優位を占めていたことを示唆する⁽¹¹⁵⁾。こうした状況にあるアテーナイが貴族層や一般市民のスポーツ熱と相まって詩人に古い競技の伝承を作り替える場を提供し、特に人気の高い戦車競走を大きく拡大させたのかも知れない。その時期は前600年頃であろうか。言語学的分析が『アイティオピス』を前6世紀の作品と断定するに十分な証左とはならず、またその中で語られていた軍隊が催すアキレウスの葬礼競技自体を後代の作と見る必要もなく、更にChantraine-Goubelによる『イーリアス』23巻の言語文体に関する詳細な分析結果が示すように、この巻が第24巻や『オデュッセイア』と同様時代的に新しい特徴を強く示すことは既に述べた。

従来古い分析論者たちや20世紀半ば以降の新分析論者たちはホメロス詩の中に結論こそ異なるが、同じく矛盾や不自然さ⁽¹¹⁶⁾を求めてきたが、『イーリアス』の葬礼競技にも同じくそれが見受けられる。Westのように、メモノーンは『イーリアス』以前には知られていなかった⁽¹¹⁷⁾、従って想定上の『メモノーン詩』はもちろん、『アイティオピス』の特に議論的であるメモノーンの参戦とアキレウスの死を中心に扱った後半の物語も後代の作と見做すのは余り説得的ではない⁽¹¹⁸⁾であろう。最近のAllan⁽¹¹⁹⁾は、『アイティオピス』の原拠・モデル説を否定するが、以上の検討から詩人は既存のversionに基づいて新しい要素を加えながら競技会を形作ったと考えられる。このように見てくると、初めに触れた二つの詩のストーリーに見られる対応・類似関係は全てではないにしろ、或る部分は特定のversion、具体的には『アイティオピス』からの借用に帰因すると考えるべきかと思われる⁽¹²⁰⁾。

注

*本稿は2012年6月3日の日本西洋古典学会第63回大会において口頭発表した原稿に若干加筆訂正し注を付したものである。本稿に続く新たに追加した後半の論考（III以下）は紙幅の関係上別の機会に譲りたい。

- (1) 以下、Epic Cycle詩の引用に際してはBernabé (1996²) の版を、また『イーリアス』と『オデュッセイア』（*Il.* と *Od.*）の邦語による引用には呉茂一 (2003); (1971–2) の訳書を用いた。
- (2) 前半はAmazonesのトロイア来援、Penthesileiaの死、Thersitesの殺害等を描く。
- (3) 例えば、AchilleusがMemnonを討ち取る (*Aeth.* arg. 14 Bernabé) ~ PatroklosがSarpedonを倒す (*Il.* 16.480–505)、Achilleusの遺体をめぐる戦い (*Aeth.* arg. 16–8 Bernabé καὶ περὶ τοῦ πτώματος γενομένης ἰσχυρᾶς μάχης Αἴας ἀνελόμενος ἐπὶ τὰς ναῦς κομίζει, Ὀδυσσεύς ἀπομαχομένου τοῖς Τρωσίν) ~ Patroklosの死体をめぐる戦い (*Il.* 17.715–61)、ThetisやNereisたちがAchilleusの死を嘆く (*Aeth.* arg. 20–1 Bernabé καὶ Θέτις ἀφικομένη σὺν Μούσαις καὶ ἀδελφαῖς θρηνεῖ τὸν παῖδα) ~ Patroklosの死後ThetisとNereisたちが嘆く (*Il.* 18.35–71; *Aethiopsis*ではMusaたちが加わっている点で*Od.* のversionとは異なる。Cf. Davies (2016) 73–5)、AntilochosがMemnonに討たれる (*Aeth.* arg. 13 Bernabé) ~ PatroklosがHektorに討たれる (*Il.* 16.818–57)。Rengakos (2015) 315–6には、10個の細部の類似点（注 (18) のWillcock (1997) 184が挙げる7つの特徴を含む）が列挙されている。更に、両詩に見られる大きな構成上の対応関係、或いは類似点については、cf. Currie (2016) 56–7, 57 Table 2.3 (**Memnonis* (*Aethiopsis*)) and *Iliad*, I: Achilleus in **Memnonis* (*Aethiopsis*) corresponds to Achilleus in *Iliad*) and Table 2.4 (**Memnonis* (*Aethiopsis*)) and *Iliad*, II: Achilleus in **Memnonis* (*Aethiopsis*) corresponds to Patroklos in *Iliad*) ≈ (2006) 24–5, 25 Tables 3, 4.
- (4) Welcker (1882³) 169–236, esp. 174–7, 189–92.
- (5) この想定上の古詩は、特に次に述べるneoanalystsによって、*Memnonis*、或いは*Achilleis*と呼ばれており、以下unattestedの意味で*を付す。因みに、Currieは**Memnonis* (*Aethiopsis*)という表現を用いている。つまり、*Aethiopsis*は後の古典期以後のPindarosやVergilius等に知られているが、*Od.* に（恐らく*Il.* にも）知られている古い同種の内容のversionは、想定上の（not attested）作品であるので**Memnonis*と表記し、しかし*Aethiopsis*と同一であった可能性は完全には排除され得ないという意味で、(*Aethiopsis*) を付している。Cf. Currie (2006) 24 ≈ (2016) 56 ‘The conceptual distinctness of **Memnonis* and *Aethiopsis* is important: the (perhaps only oral) poetry known to the *Odyssey* (almost certainly) and to the *Iliad* (arguably) is taken to be the **Memnonis*, while the poem known to classical and later authors (Pindar, Virgil, and others) is the *Aethiopsis*. However, the distinction is collapsible: it cannot be excluded that we are dealing with one poem, if it turns out that the *Aethiopsis* is earlier than the Homeric epics.’
- (6) neoanalystsに影響を与えた研究者たちの研究史については、cf. Kullmann (1960) 18–27; (1981) 6–7 = (1992) 68; (1991) 428 = (1992) 103–4; West (2003b) 2–4. 既に1906年にO. Gruppeは、*Aethiopsis*が*Il.* と一致する特徴が広範囲にわたるゆえに、*Il.* の詩人と*Od.* の作者が恐らく*Aethiopsis*の伝説素材だけでなく、*Aethiopsis*自体を知っていた可能性が極めて高いと見做し、その後1910年にD. Mülderは、より慎重にAchilleusの戦死を含む叙事詩‘Achilleis’を想定し、後の詩人が新しい人物Patroklosの戦死や葬儀等を描く際にこれをモデルとして用いたと推定した。他方1914年に‘Memnonlied’を想定したE. Löwyによれば、*Il.* のPatroklosの戦死はAchilleusのそれに由来し、一方Memnonは*Il.* のSarpedonのモデルとなった、また*Il.* の主な骨組みは既に存在し、更にAchilleusの出陣の動機として用いられた（と推定される）MemnonによるAntilochosの殺害が、Patroklosの一連のエピソードを模倣したものであった、従って*Il.* とMemnon詩の物語は各々相互に影響を及ぼしたという。Cf. West (2003b) 3–4. その後のneoanalystsに関する全般的な研究史について詳しくは、cf. Willcock (1997) 174–89.
- (7) Kakridis (1949) 65–95, esp. 89, 95は、*Il.* の一連の物語（Patroclea）のモデルとなった詩を*Aethiopsis*、或いは古い叙事詩**Achilleis*と見るべきかについては、ここでは十分に検討できないとして明言を避けている。因みに、Kakridisはこの*Il.* と*Aethiopsis*の関係について、既に‘Αθηνᾶ 42 (1930) 66–78の中

- で論を展開している。筆者未見。Cf. e.g. Kakridis (1949) 65 n. 1; Willcock (1997) 175 n. 1; West (2003b) 4 n. 16.
- (8) Pestalozzi は或る時には *Aethiopsis* = **Achilleis* と見做すが、或る時には、*Aethiopsis* と *Il.* の両詩の類似したストーリーが **Achilleis* に由来すると述べ、必ずしも一貫していない。例えば、*Il.* 8.80–117 の Nestor の救出場面が *Aethiopsis* に由来する (Pestalozzi (1945) 11 „die Originalität des ‚kyklischen‘ Dichters“) と見做す一方、*ibid.*, esp. 34, 38においては、古詩 **Achilleis* が *Il.* の Vorlage であったと述べている。Cf. Davison (1947) 29 ‘and P. (sc. Pestalozzi) generally speaks as if the *Aethiopsis* were identical with the *Achilleis*. At other times he appears with greater caution to regard the *Achilleis* as having been a common source for the *Iliad* and for the *Aethiopsis*.’
- (9) Schadewaldt (1951), esp. 158 „Wir nennen fortan ‘*Memnonis*’ die eigentliche Aithiopsis, nämlich die Geschichte von Achilleus’ Kampf mit dem Aithiopen Memnon, seinem Sieg über ihn und seinem eigenen Tod . . .“
- (10) 因みに、Kullmann (1991) 429 Anm. 25 = (1992) 105 Anm. 25 (cf. (1981) 33 Anm. 76 = (1992) 91 Anm. 76) は、Davies (1989a) 4–5 = (2001) 4 ‘The fullest and most detailed book to consider the question arrives at a simple (some might allege simplistic) answer: Homer in each case was drawing on the relevant poem from the Epic Cycle. But this theory swiftly encounters an obstacle: precisely those post-Homeric linguistic forms mentioned above’ や他の研究者たちの批判、即ち Kullmann がどの場合においても、Epischer Kyklos が *Il.* に先行すると見做したという誤解は unkorrekt としている。つまり、Schadewaldt と Pestalozzi は *Aethiopsis* の主要部分自体 (Pestalozzi によれば、Kyklos の他の部分も) が vorhomerisch であると見做したのに対して、Kullmann (1991) 429 = (1992) 104–5 は、*Cypria*, *Aethiopsis*, *Il. Persis*、或いはこれらの叙事詩の原形 (口誦詩の可能性がある) が *Il.* よりも以前に存在したか否かの問題については、差し当たり留保したと述べている。Cf. Willcock (1997) 185–6 ‘His discussion is not limpidly clear, perhaps, and consequently other Homerists have got a stronger impression than he probably intended, so that he has more recently claimed that he has been misunderstood’; Burgess (2001) 240 n. 3 ‘he (sc. Kullmann) complains that he has been misunderstood on this issue.’
- (11) Kakridis (1949) 1–10, esp. 2, 7–10 の造語による。
- (12) Cf. Currie (2006) 26 ≈ (2016) 57–8 ‘The argument that the **Memnonis* (*Aethiopsis*) is a ‘source’ for the *Iliad* has been a cornerstone of neoanalytical scholarship and has increasingly gained acceptance’; Rengakos (2015) 316 ‘Classic neoanalysis has decided that (an oral pre-stage of) the *Aethiopsis* predated the *Iliad* and served as its source. This view, which was strongly opposed at the beginning by D. Page, U. Hölscher, A. Dihle and K. Reinhardt, is now widely accepted by scholars, at least with regard to Nestor’s rescuing, Patroclus’ death, the lament of Thetis and the funeral games in honour of Patroclus.’
- (13) Burgess に対する最近の簡潔な反論については、cf. Currie (2006) 26–7 ≈ (2016) 58–9.
- (14) West (2003b) 5–7 は、*Il.* 16–23 巻と *Aethiopsis* の広範囲にわたる平行関係 parallelism は単なる偶然ではないとするが、**Memnonis* 説については、Memnon のストーリーが *Il.* の詩人には知られていなかったという理由から支持していない。Cf. West (2003b) 6–7 ‘And once one has set aside the prejudice that Cyclic material must be secondary, there can be no serious doubt that the Achilles story was primary and served as the matrix for the narrative about Patroclus in the *Iliad* . . . The *Iliad* poet knew the story of Achilles’ death at the Scaean Gates, and the events that followed it in the *Aethiopsis*, but he did not know the Memnon episode that preceded it in the Cyclic epic.’ West に対する最近の反論については、cf. Currie (2006) 27–31 ≈ (2016) 59–63.
- (15) Allan (2005) 13–5, esp. 14 n. 62 ‘In other words, it is possible that the *Iliad* poet was influenced by previous accounts of Achilles’ death (perhaps even sung by him) in constructing his Patroclus narrative, especially in the involvement of Paris and Apollo, the battle over the corpse, and the warrior’s funeral, but there is no need to see the cyclic *Aethiopsis* as a direct source or model.’

- (16) Dowden (1996), esp. 48–9 ‘It cannot wholly be excluded that Arktinos was an 8th-century poet and antedates Homer, a view which Notopoulos was prepared to entertain’, 56, 60–1.
- (17) Currie (2006) 23–45, esp. 31 ≈ (2016) 55–77, esp. 63 ‘In short, the traditional neoanalytical position seems fully viable: that the *Iliad* interacts with the **Memnonis* (*Aethiopsis*) and not vice versa. The relationship between the two is then correct as given in Tables 2.3 and 2.4, and the **Memnonis* (*Aethiopsis*) rightly occupies the left-hand column as the earlier and → motivally prior version.’
- (18) Cf. Kirk (1962) 211–27. こうした不自然さや矛盾はPatroklosの出陣以降にも多く見られる。例えば、Thetisが子AchilleusにHektorの殺害後直ちに死の定めが待っている（*Il.* 18.96 αὐτίκα γάρ τοι ἔπειτα μεθ’ Ἑκτορα πότμος ἐτοῖμος 「だって直ぐさまヘクトールにつぎ、死ぬ日があなたを待っているのです」）と予言したにもかかわらず、その後Patroklosの葬儀やHektorの遺骸の贖い等のエピソードが続く。しかし、Davies (2016) 6はneoanalystsの学説の出発点（Hölscher (1955) 392–6に7つのモチーフとして、またWillcock (1997) 184には7つの特徴として挙げられている）となる、こうした不自然さの数（‘the number of oddities and anomalies’）を誇張し過大視すると批判しており、Dodds (1968²) 16–7もoral poetryは矛盾等に対しては寛容であるので、analystsの用いるような矛盾からの論法には慎重でなければならないと述べている。
- (19) 重複する登場者及び神々については省略。
- (20) その他の木馬の勇士は、Neoptolemos、Philoktetes、Antiklos、Menestheus、Thrasymedes、Eurymachos、Ialmenos、Thalpios、Antimachos、Demophoon、Amphimachos、Megesの12人で、両葬礼競技には登場しない。
- (21) 登場者18人（老Nestorと死亡者3人を除く：22–4 = 18）中の木馬の勇士の割合。
- (22) 登場者18人（Nestorと死亡者Aiasを除く：20–2 = 18）中の木馬の勇士の割合。但し、戦車競走に欠行あり。
- (23) 競技参加者12人（死亡者AntilochosとAiasを除く：14–2 = 12）中の木馬の勇士の割合。
- (24) 競技参加者15人（弁論競技のNestorと死亡者Aiasを除く：17–2 = 15）中の木馬の勇士の割合。
- (25) Keydell (1963) 1279.55–9; Vian (1959) 37, 39; (1963) 134.
- (26) Keydell (1963) 1287.24–7.
- (27) Vian (1969) 85 « Quintus adjoint à cette liste . . . et trois noms pris, semble-t-il, au hasard dans le Catalogue des Vaisseaux: Ménesthée, Ialménos et Thalpios. » しかし、MenestheusはPaus. 1.23.8に木馬の勇士として言及されている。
- (28) *Il. Parva* fr. 20 Bernabé (= Paus. 10.25.8).
- (29) *Il. Persis* arg. 21–2 Bernabé; cf. *Il. Persis* fr. 6.1 Bernabé Θησεΐδαις.
- (30) この2人の名はQ.S. によって作られたと、Keydell (1963) 1287.32–6は推定している。写本上の誤りがある可能性については、cf. 後注 (32).
- (31) 但し、Amphimachosは「船揃い」（*Il.* 2.620）に言及されているが、*Il.* 13.185–6ではHektorによって殺害されている。
- (32) 木馬の勇士のリストの30人の中23人は木馬の段以外において或る役割を演ずるが、他の7人はこのリストにのみ現れる。Vian (1969) 85–6は、この7人の中3人（Menestheus、Ialmenos、Amphimachos）は*Il.* の「船揃い」から取られ、これを除く4人について、Antiklosは*Od.* 4.286から選ばれ、また残りの3人、Amphimachos (12.325)、Antimachos (12.323)、Eurymachos (12.321) については、名が類似する点（-machosの繰り返し）から写本上疑わしいとし、このAntimachosをAmphimachos、AmphimachosをAmphilochosに訂正している。
- (33) Apoll. *Epit.* 5.14 εἰς τοῦτον (sc. τὸν δούρειον ἵππον) Ὀδυσσεὺς εἰσελθεῖν πείθει πεντήκοντα τοὺς ἀρίστους, ὥς δὲ ὁ τὴν μικρὰν γράψας Ἰλιάδα φησί, τριαγλίους (codd.: τρεῖς καὶ δέκα A. Severyns (ΦΗΣΙΓΓ ε ΦΗΣΙΠΓ ortum)) κτλ. (cf. West (2013) 204 and n. 50); Eust. *Od.* 1698.2 φασὶ δὲ τοὺς εἰς αὐτὸν (sc. τὸν δούρειον ἵππον) καταβάντας τινὲς μὲν ὧν καὶ Σησίχορος (cf. Stesich. fr.199 PMG) ἑκατὸν εἶναι, ἕτεροι δὲ δώδεκα. (下線は筆者による。)

- (34) *Il. Persis* fr.2 Bernabé (I) Schol. Monac. in Verg. *Aen.* 2.15 Arctinus (Timpanaro: aractinus cod.) dicit fuisse (sc. equum Troianum) in longitudine pedes C et in latitudine pedes L. eius autem caudam et genua mobilia fuisse tradidit.
- (35) Campbell (1981) 101–2 on 12.306–335 (B), 106–8 on 12.318, 322.
- (36) 30人が全てではない。Cf. Q.S. 12.327–8 ἄλλοι δ' αὖ κατέβαινον ὅσοι ἔσαν ἔξοχ' ἄριστοι./ ὅσους χάνδανεν ἵππος εὐξοος ἐντὸς ἐέργειν 「更にまた、特に選り抜きの他の戦士たちもすべて乗り込んだ、よく磨かれた木馬が内部に収容できる数の（戦士たちが）。」
- (37) Campbell (1981) 102 on 12.306–335 (B) ‘Q. contents himself with a sketchy and downright monotonous list, which, to judge by the nature of the ornamental epithets (note repetition in κρατερός 315, 325 cf. 326; ‘godlike’ 316 ~ 322, 319, 324; ἐρίθυμος [318n.] and ὀβριμόθυμος are imperial in flavour), may well have been founded wholly or in part on a simple prose record or commentary.’ しかし Vian (1969) 84は、こうした見方（失われた目録 catalogue perdu）に対して否定的である。
- (38) これらの epithets の例を挙げれば、κρατερόςについては、12.315 σὺν δὲ κρατερὸς Μενέλαος (cf. 12.325, 326 (κραταιοῦ) 、ἀντίθεοςについては、12.316 τε καὶ ἀντίθεος Λιομήδης (cf. 12.319, 322, 324) 、ἐρίθυμοςについては、12.318 σὺν δὲ Θόας ἐρίθυμος (cf. 1.532, 2.364, 6.316, 520, 539, etc.) 、ὀβριμόθυμοςについては、12.322 καὶ Ἰάλμενος ὀβριμόθυμος (cf. 1.178, 377, 787, 2.293, 343, 3.214, etc.) 。
- (39) Kullmann (1960) 119 „Neben dem Schiffskatalog benutzt hier Q. S. Quellen, die letztlich auf die Kleine Ilias zurückgehen müssen.“ 因みに、*ibid.* 119 Anm. 3によれば、*Il. Parva*には木馬の勇士のリストはなく（3000人とされるため、リストは考え難い）、むしろ神話集 (Mythographie) が *Il. Parva*の登場人物のストック (Personenbestand) から独立してリストを作成したという。
- (40) *Il. Parva* arg. 1.14–23 Bernabé.
- (41) *Il. Persis* arg. 10–3 Bernabé.
- (42) Cf. 注 (33).
- (43) *Nost.* arg. 7–9 Bernabé.
- (44) Cf. Kullmann (1960) 117.
- (45) *Il.* 23.536–8 λοισθος ἀνὴρ ὄριστος ἐλαύνει μώνυχας ἵππους./ ἄλλ' ἄγε δὴ οἱ δῶμεν ἀέθλιον ὡς ἐπικέες/ δεύτερ' 「一番優れた人物が殿らにつき、単蹄の馬を駆ってくる、それゆえ、さあ、どうだ。彼に二等の褒美をやったら、世の思惑にも適おうように。だが一等賞は、テューデウスの子に取らせよう。」
- (46) Apollod. *Epit.* 5.5 τιθέασι δὲ ἐπ' αὐτῷ ἀγῶνα, ἐν ᾧ νικᾷ Εὐμηλος ἵπποις, Λιομήδης σταδίῳ, Αἴας δίσκῳ, Τεύκρος τόξῳ.
- (47) Kullmann (1960) 112.
- (48) Apollod. *Bibl.* 3.10.8.
- (49) *Ibid.* 3.7.2.
- (50) *Ibid.* 1.9.16.
- (51) Cf. Kullmann (1960) 90.
- (52) Cf. Burgess (1997) 10 n. 27; (2001) 217 n. 84; Cairns (2001) 51 n. 186; Currie (2016) 73 n. 209. Reinhardt (1961) 349, 366–7も同意見だが、彼は neoanalysis を批判している文脈においても、根本的には neoanalyst とされる。Cf. Burgess (1997) 7 n. 14.
- (53) *Il.* 2巻の「船揃い」が古い poem に由来する可能性については、cf. Kirk (1962) 224; Dodds (1968²) 11 ‘... he (sc. T. W. Allen) also held ... and that the Catalogue of Ships, which was certainly not composed for our *Iliad*, is the oldest piece of Greek verse we possess. On the last point his view appears to be substantially confirmed by recent research, and is accepted in principle by Bowra, Miss Lorimer and Wade-Gery’; Kirk (1985) 169 ‘it (sc. the catalogue) certainly formed part of the epic as early as the late seventh century B.C. これに対して、*Il.* 詩人の演目の一つであったという

- 見方については、cf. West (2015) 97 ‘The *Iliad* poet himself evidently had a poem about the Aulis gathering in his repertoire; he has adapted his Catalogue of Ships from it.’
- (54) Cairns (2001) 41–2は「船揃い」がより古い詩的物語 (poetic account)、恐らく *II* 詩人自身のaccountに由来する可能性を指摘するが、重要な役割を担うPatroklosを *II* 詩人が「船揃い」に加えないというのも奇異である。
- (55) Janko (1992) 312–4.
- (56) Burgess (2001) 81–4, esp. 83 ‘Both battles over a corpse and funeral games seem to be typical motifs . . . whereas the funeral games for Patroclus represent an episode of Homeric invention (with the result that the games necessarily reflect the traditional games for Achilles).’ Patroklosの競技会がtraditionalなAchilleusの葬礼競技を反映しているというneanalystsの見方については、cf. e.g. Pestalozzi (1945) 33; Kullmann (1960) 81, 110, 333–5; Snodgrass (1998) 118 ‘A well-known scholarly theory holds that Homer has adapted his account from an older poetic version, in which these games were actually held for Achilles himself; cf. Burgess (2001) 81 and 221 n.121. これに対して最近では、Davies (2016) 16は、‘So too *Iliad* XXIII’s Funeral Games for Patroclus remind him (sc. Kakridis) of the similar events celebrated for Achilles in the *Aethiopis* and lead him, following in the wake of Pestalozzi (1945:33), to pose the inept question (88) “Which is the prototype and which the imitation?” As we shall soon see (page 78 below), funeral games in memory of a hero are so much the antithesis of rare that there is not the slightest need to narrow down the range of possibilities in this extreme manner’ と反論するが、逆にCurrie (2016) 242は、‘The funeral games of Patroklos were probably an invention of the *Iliad*, conceived as an exclusionary doublet of the evidently traditional funeral games of Achilleus . . . (The relationship between the funeral games for Patroklos and those for Achilleus cannot easily be argued to be a typological one by instancing the funeral games for Pelias: the two former are in a much closer relationship to each other than either are to the third.)’と支持している。
- (57) Mazon (1967²) 221 n. 3はun aoriste inchoatifの意とし、Chantraine–Goube (1972) ad loc.も、「ils se mirent en branle」「彼らは動き出した」と解している。
- (58) 未完了過去とすれば、「彼らは去ろうとし（てい）た」等の意と考えられる。これに対して、Richardson (1993) ad loc. は、*II* 23.257と最後の一語が異なる *II* 24.801 *χεύαντες δὲ τὸ σῆμα πάλιν κίων· αὐτὰρ ἔπειτα*（この後Priamosの館でHektorの葬儀後の宴が催される）も葬儀終了の表現であることから、詩人がこうしたregular phraseを使用した可能性を示唆しており、この場合κίωνは通例のaoristの意（「彼らは立ち去った」）と考えられるので、そのままこの表現を詩人が使用したと推論できる。しかし、どのように解釈してもアカイア勢が葬儀後に競技会を催す意図がなかったことに変わりはなく、従ってLeaf (1900–2) *II* 468が指摘するように、葬礼競技が挿入される以前は、257行のπάλιν κίωνの後に *II* 24.3 *αὐτὰρ Ἀχιλλεύς*が続いた可能性がある。この解釈が正しければ、後続の競技会は葬儀の場面と同時期に作られたというよりは、むしろ後に加えられたと考えることができる。
- (59) E.g. Wilamowitz (1920²) 69–70; Leaf (1900–2) *II* 468–9, 490 on *II* 23.257.
- (60) 弓試合の不自然な、或いは拙い描写は、モデルとなる或るversion(s)を模倣、或いは利用したことによるものであろう。Cf. e.g. Willis (1941) 395–7; Kullmann (1960) 334; Schadewaldt (1966) 156 Anm. 3 (die Umsetzung einer ‘Quelle’); Mazon (1967²) 225 n. 1 (l’imitation d’un modèle).
- (61) Wilamowitz (1920²) 69; cf. Willis (1941) 393–5; Schefold (1992) 260. この見方は、何故Peliasの孫にあたるEumelosが戦車競走に参加しているかの一説明として興味深い。しかし、Patroklosの葬礼競技とPeliasの葬礼競技の関係は疑わしく、注 (56) に引用したCurrieの見解を参照。
- (62) Cf. 注 (46).
- (63) Chantraine–Goube (1972) 16, 21–4. *II* 10巻 (Doloneia)、23巻 (葬儀と競技会)、24巻の所々に *Od.* 的単語、formulasの塊が目立つ (conspicuous agglomerations) という同様の指摘については、cf. Kirk (1962) 320. 因みに、*II* 24巻がその他の巻よりも言語とテーマの面で *Od.* に近いとしばしば主張されてきた (cf. Richardson (1993) 21–4) が、逆に *II* 24巻と *Od.* は異なるという反論 (cf. *ibid.* 21–2 n.

- 23) もある。
- (64) 他方、Kirk (1962) 223のように、特に弓試合を含む798–883（武装試合・鉄塊投げ・弓試合の3種目）をinterpolationと見る見解もある。こうしたinterpolation説に対して、Chantraine–Goube (1972) 24, 29は、「*addition récente*」と考えるべきではなく、第23巻もIIに欠くべからざる部分であり、他の巻と密接に結びついている (cf. Chantraine–Goube (1972) 17–8) ゆえに、一人の偉大な詩人の作品 (*ibid.* 17 « l'œuvre d'un grand poète ») であり、一人の吟遊詩人が前8世紀半ば頃殆ど最終的な叙事詩に形作ったと結論している。Cf. *ibid.* 28 « Nous admettons donc qu'un aède, vers le milieu du VIII^e siècle, a donné sa forme à peu près définitive à l'épopée . . . » 略同様に、Mazon (1967³) 224–5も、Patroklosの葬礼競技が前7世紀以前とは言い難い多種目の構成を示す点等からII 23巻の真正さを疑う見解には否定的である。論拠として、葬礼競技自体が古い風習である点、Amarynkeus王の葬礼競技 (II 23.630–42) では5種目（拳闘・レスリング・徒競走・槍投げ・戦車競走）が催されていること、II 11.699–70 τέσσαρες ἀθλοφόροι ἵπποι αὐτοῖσιν ὄχεσθιν/ ἐλθόντες μετ' ἄεθλα「（以前に）四匹の、競技の賞を貰うた馬を、車ぐるみに競技の場へさしつかわせた」ではオリュンピア競技会に（公式に）前680年に導入されたと伝えられる競技用の4頭立て戦車（Elisへ送られた）が言及されていることを挙げている。しかし、これらの点は逆に後代の作であることを示唆するとも解釈できる。因みに、幾何学様式時代後期の壺絵には多数の戦車競走のシーンが描かれ、しばしば長いrobeを身にまとった職業的御者が見られる。Cf. Roller (1981b) 114 and nn. 51–2. 一頭と2頭立て戦車競走が大半を占め、3頭及び4頭立て戦車はごく少ない。特に4頭立て戦車競走の一例については、cf. Davison (1961) 43 no. 4 (Caudron, Athens 810), 156 (List of Figures), Fig. 38.
- (65) Willis (1941) 397–402, 417. II 23巻では順序（戦車競走・拳闘・レスリング・徒競走・武装試合・鉄塊投げ・弓術・槍投げ）が異なるが、Willis (1941) 402は順序を変える理由が特に見当たらないことから、Homerosが伝統的順序を変えることで革新をもたらしたとは限らず、むしろそうした順序が必要とされるようなより古いsourceに従った可能性を指摘している。いずれにしても、Patroklosの競技会が後代の叙事詩、Verg. *Aen.* 5 (Anchises追悼の競技会)、Stat. *Theb.* 6 (Opheltosの葬礼競技) 等の模範となり、葬礼競技の描写を加える英雄叙事詩の伝統に強い影響を与えたと考えられる。
- (66) Vian (1959) 36–7 « Il faut également solliciter les textes pour retrouver l'ordre donné par QS dans les Jeux en l'honneur de Pélias. Sur le coffre de Cypsélos (Paus., V, 17, 9–10), se succédaient les tableaux suivants . . . ; à supposer même que Pausanias ait inversé l'ordre authentique, les points communs avec les Jeux de QS sont rares et prêtent à discussion. » つまり、Kypselosの箱に描かれているとされる競技の順序（戦車競走・拳闘・レスリング・円盤投げ・徒競走；cf. 注 (108)）を逆にしても、Q.S.の競技種目の順序（cf. 注 (68)）と共通する点は少ない。
- (67) オリュンピア競技会のスケジュールとプログラムについては学者間で意見の一致が見られず、最初の3世紀間（472 B.C.以前）に関しては特に資料が乏しい。因みに、468 B.C. 以後のスケジュールについて、Lee (2001) 106–9 (Appendix: Reconstructions of the Schedule Compared) に1830年のL. Dissenから2001年のLeeに至るまでの研究者22人の諸説が表にまとめられているが、様々な説（16通り）に分かれる。しかし、こうしたスケジュールも時代的に静的（static）ではなく、多かれ少なかれ流動的であったと見られる。Cf. *ibid.*, esp. 1–3, 100–1. 競技の順序についても幾つかの種目を除いては明瞭なtestimonyに欠け推測の域を出ず、同種の或いは同じグループ内での各競技についても不明な点が多い。例えば、4頭立て戦車競走等の馬術競技、五種競技、徒競走（後69年には既に、ドリコス走・スタディオン走・ディアウロス走の順であったか）については、cf. *ibid.*, esp. 38–9, 41, 54–5, 100.
- (68) Keydell (1963) 1279.43–9. Q.S. のAchilleusの葬礼競技の順序は、（Nestorの弁論競技・）徒競走・レスリング・拳闘・弓術・円盤投げ・幅跳び・槍投げ・パンクラティオン（全力技）・戦車競走・競馬であるが、他方オリュンピア競技会の優勝者リスト（*POxy.* II 222 (Ol.75–Ol.78 [480–468 B.C.]、Ol.81–Ol.83 [456–448 B.C.]、Ol.96 [396 B.C.]）≈ *POxy.* XVII 2082 (Ol.121 [296 B.C.]、Phlegon *FGrH* 257 F12 (Ol.177 [72 B.C.]）は、スタディオン走・ディアウロス走・ドリコス走・五種競技・レスリング・拳闘・パンクラティオン・少年のスタディオン走・少年のレスリング・少年の拳闘・武

装競走・4頭立て戦車競走・競馬の順序で記録されており、Q.S. の記す葬礼競技の順序に多少類似している。しかし、この順序はオリュンピア競技会で催された実際の競技の順序を必ずしも示すものではなく、各種目がこの競技会に導入された年代順に列挙されたものと考えられている。Cf. Vian (1959) 36 n. 6; Lee (2001) 90–1; Christesen (2007) 206 ‘The structure of these three victor lists (sc. *POxy.* II 222, *POxy.* XVII 2082, Phlegon *FGrH* 257 F12) does not, as one might think, depend upon the order in which the events were actually contested. Rather, the events are put into two groups, gymnastic and hippic, and the order within each group is determined by the order in which the events were added to the Olympic program.’ 因みに、オリュンピア競技会における優勝者リストの順序とスタディオン走に始まる各種目の導入年の比較については、cf. Christesen (2007) 211–2 (Table 13: The Structure of Catalogs of Olympic Victors and the Evolution of the Olympic Program).

- (69) Cf. Vian (1959) 38 « Il est visible que QS a été réduit à ses seules ressources pour composer le livre IV. C’est là ce qui explique nombre d’anachronismes, introduits d’après ce que l’auteur savait des Jeux panhelléniques et en particulier des Jeux Olympiques. » 他方、*ibid.* 37–9の資料分析結果によれば、Q.S. は各競技の細部を描写する際に様々なモデル、即ちHomeros詩、ヘレニズム期のApollonios Rhodios、Theokritos、更にローマのVergiliusに依拠する他、Apollodorosのような神話作家の神話集を通じて*Aethiopsis*の葬礼競技をも使用し、特に競技参加者の選択についてはII 23巻に負うところが大きい。
- (70) 後2世紀にはオリュンピア競技がrenaissanceを迎え (cf. Farrington (2014) 158 ‘... although it has long been acknowledged that the Olympic games underwent a renaissance in the second century’), Smyrnaでは帝政時代（後2、3世紀頃）に ‘Ολύμπια ἐν Σμύρνῃ, Ἀδριανία Ὀλύμπιαが催されていた。Cf. *ibid.* 186–7, 196 Fig. 6.2. Table 2: Events in local Ὀλύμπια. また、*ibid.* 199 Fig. 6.7. Inscriptions from Asia Minor recording Olympic victoriesによれば、小アジアではオリュンピア競技会の優勝を記録する碑文数が、A.D. 151–200（7個）及びA.D. 201–250（8個）の100年間に大幅に急増した。後3世紀頃のQ.S. は競技の種目やその順序を決める際にII 23巻等よりも、むしろ当時盛んであった実際のこうした競技会を参考にしたのかも知れない。特に種目の選択にこの傾向があるという見方については、cf. Keydell (1963) 1279.11–24.
- (71) Cf. 注 (46). 他方、Patroklosの競技 (II 23.257–897) の場合、戦車競走・拳闘・レスリング・徒競走・武装試合・鉄塊投げ・弓術・槍投げであるが、このAchilleusの競技には、4競技（拳闘、レスリング、武装試合、槍投げ）の言及はない。
- (72) Apollod. *Epit.* 4.8 καὶ θάψας Πάτροκλον ἐπ’ αὐτῷ ἀγῶνα τίθησιν, ἐν ᾧ νικᾷ ἵπποις Διομήδης, Ἐπειὸς πυγμῇ, Αἴας καὶ Ὀδυσσεὺς πάλῃ.
- (73) Vian (1963) 134によれば、注 (46) に引用したApollod. *Epit.* 5.5のAchilleusの葬礼競技の要約はProklosの*Aethiopsis*の梗概と同じくtradition cyclique (sc. *Aethiopsis*) に遡るという。West (2003a) 112–3もProklosの*Aethiopsis*の梗概のテキストと英訳にこのApollodorosの箇所を加え、id. (2003b) 1においても同じくProklosの*Aethiopsis*の梗概の英訳にこの箇所を付加している。更に、cf. Davies (2016) 78 ‘These details (sc. in Apollod. *Epit.* 5.5) too may go back to the *Aethiopsis*...’
- (74) *Od.* 24.85–6 μῦθη δ’ αἰτήσασα θεοὺς περικαλλέ’ ἄεθλα/ θῆκε μέσῳ ἐν ἀγῶνι ἀριστήεσσιν Ἀχαιῶν「また母上は、（葬儀のため）神々にお問い合わせ、ことさら美事な賞品を競技の会の催しに、アカイア勢の大將がたへと、さし出された」；Q.S. 4.115–7 τοῖσι δ’ ἄμ’ ἀγορμένοισι Θέτις κυανοκρήδεμνος/ θῆκεν ἄεθλα φέρουσα καὶ ὀτρύνεσκεν Ἀχαιοὺς/ αὐτίκ’ ἀεθλεύειν κτλ.（本注および次注の下線は、筆者による。）
- (75) Apollod. *Epit.* 5.5 τιθέασι (sc. τὸ σπράτευμα) δὲ ἐπ’ αὐτῷ ἀγῶνα, ἐν ᾧ νικᾷ Εὐμηλος ἵπποις, Διομήδης σταδίῳ, Αἴας δίσκῳ, Τεῦκρος τόξῳ; *Aeth.* arg. 22-4 Bernabé οἱ δὲ Ἀχαιοὶ τὸν τάφον χώσαντες ἀγῶνα τιθέασι κτλ.
- (76) 葬礼競技は古く青銅器時代にも周期的ではなく、単発的に催されていたことが知られている。Cf. Currie (2005) 113.

- (77) Roller (1981a) 2–6; cf. Kyle (1993) 19 and n. 19. また、Roller (1981a) 12は葬礼競技の慣習が Hesiodos以前に遡り、Homerosの描写は同時代の風習を反映しており、その逆ではない、つまり叙事詩 (epic practice) の影響ではないと推測している。Currie (2005) 106 and n. 98も同じ見方であるが、別な解釈、或いは反対意見については、cf. Kyle (1993) 17 n. 9; Seaford (1994) 120–1.
- (78) この3個の円盤も競技会の賞品であって、それには以下のような碑銘 (Roller (1981a) 4から書写) が見られる。(1) Τελεσσαρκο ἐκ τῷ ἐρί[ο], (2) ἐκ τῶν ἐ. [ρίο]ν, (3) ἐχ τῶν ἐρίων εἰ<μ>ι. このἐκ τοῦ ἡρίου, ἐκ τῶν ἡρίωνは「家族の墓から」の意。(2)について、Gardiner (1930) 156 fig. 112は、ΕΚ ΤΩΝ ΑΘΛΩΝと読むが、cf. Roller (1981a) 14 n. 24 ‘L. H. Jeffery . . . proposed the restoration ἐ. [ρί]ον, which seems more likely, since the phrase ἐκ τῶν ἄ[θλ]ων is not paralleled elsewhere in Attic inscriptions.’
- (79) Λαροσοφος μ’ ἐπι παιδι εφ’ αἰθλα εδῶκε Εὐμ[ε]νῶι 「ラーオソオスが自分の子、エウメイノスのために（催した葬礼競技会の）賞品である私を与えた（奉納した）。」 前550年頃の韻文の碑銘。競技会の賞品であったと考えられている。Jeffery (1990) 92より書写。Cf. Roller (1981a) 3 no. 6.
- (80) Rohde (1898²) I 29–30 m. Anm. 1.
- (81) Cf. e.g. Roller (1981a) 6–10. アテーナイのEpitaphiaについては、cf. Thuc. 2.34（戦没者国葬の儀式の模様）; Arist. *Ath. Pol.* 58.1 ὁ δὲ πολέμαρχος θύει μὲν θυσίας τῇ τε Ἀρτέμιδι τῇ ἀγροτέρᾳ καὶ τῷ Ἐνυαλίῳ, διατίθεισι δ’ ἄγῳνα τὸν ἐπιτάφιον, καὶ τοῖς τετελευτηκόσιν ἐν τῷ πολέμῳ καὶ Ἀρμοδίῳ καὶ Ἀριστογέιτονι ἐναγίσματα ποιεῖ; Kyle (1993) 42–5, 55; Currie (2005) 92, 108–9.
- (82) 軍隊に競技会を主催させる場合、恐らくAchilleusはどの競技においても敗れることはない、詩人はこれを回避する策を考案する必要に迫られ、結局Achilleusに主催させる以外に選択肢はなかったかも知れない。Cf. *Il.* 23.274–5 εἰ μὲν νῦν ἐπὶ ἄλλῳ ἀθλευόμεν Ἀχαιοί, / ἦ τ’ ἂν ἐγὼ (sc. Ἀχιλλεύς) τὰ πρῶτα λαβὼν κλισίηνδε φερόιμην 「これが今とて他の者のためアカイア軍が競技をするなら、いかさま私がまっ先に取り、陣屋へ運び帰りもしたろう」; 791–2 ἀργαλέον δέ / ποσσὶν ἐριδήσασθαι Ἀχαιοῖς, εἰ μὴ Ἀχιλλεῖ 「アカイア人には駆け競で負かすのはちと骨折ります、アキレウス以外は。」 逆に、Homeros以前のAchilleusに関する古い叙事詩ではThetisが子の葬礼競技会を設けたという見解については、cf. Heubeck (1992) 369–70 on *Od.* 24.85–92 ‘It seems probable that Thetis had instituted funeral games in honour of her son in the pre-Homeric Achilles epic. If this supposition is correct, there is also an indirect reference to this older description at *Il.* xxiii, where Achilles holds games in honour of his “substitute”, Patroclus. For the post-Homeric *Aethiopsis* an ἄγών in honour of Achilles is guaranteed by the testimony of Proclus . . .’
- (83) *Aeth. arg.* 22–4 Bernabé οἱ δὲ Ἀχαιοὶ τὸν τάφον χώσαντες ἄγωνα τιθέασι, καὶ περὶ τῶν Ἀχιλλέως ὅπλων Ὀδυσσεῖ καὶ Αἴαντι στάσις ἐμπίπτει. Cf. e.g. Kullmann (1960) 335; Burgess (2001) 81 and 222 n. 122.
- (84) Wilamowitz (1920²) 68.
- (85) *Il. Persis* arg. 15–6 Bernabé Κασσάνδραν δὲ Αἴας ὁ Ἰλέως πρὸς βίαν ἀποσπῶν συνεφέλκεται τὸ τῆς Ἀθηνᾶς ξόανον.
- (86) 以下に、Arktinosの年代（前8世紀）に関する古代の見方二例を挙げる。*Aeth. test.* (De auctore) 1–2 Bernabé, 1 Suda s.v. Ἀρκτίνος (I 361.19 Adler) Ἀρκτίνος Τήλεω, τοῦ Ναύτεω ἀπογόνου, Μιλήσιος, ἐποποιός, μαθητὴς Ὀμήρου, ὡς λέγει ὁ Κλαυδόμενιος Ἀρτέμων ἐν τῷ περὶ Ὀμήρου (*FGrH* 443 F 2), γεγρονὸς κατὰ τὴν θ’ Ὀλυμπιάδα (744/1) μετὰ τετρακόσια ἔτη τῶν Τρωϊκῶν, 2 Euseb. *Chron.* Ol.1 (II 78 Schöne) Ἀρκτίνος Μιλήσιος ἐποποιός ἤκμαζεν.
- (87) Dion. Hal. *Ant. Rom.* 1.68.2 παλαιότατος δὲ ὧν ἡμεῖς ἴσμεν ποιητὴς Ἀρκτίνος.
- (88) Burgess (2001) 8–10. Cf. *ibid.* 142 ‘Kullmann (1960: 225, 359) has argued that the poem originally joined with the *Iliou Persis*, noting that the author of both was said to be Arctinus. The attributions to authors are probably too unreliable for this argument to be persuasive’; Davies (2001) 5 ‘For a start, it is now generally known that many of the impressively specific datings of early Greek poets preserved in later authors are totally unreliable and based on an arbitrary

- chronological 'chain' worked out in the second century BC.'
- (89) Kullmann (1960) 216.
- (90) *Aethiopis*が後代（恐らく前6世紀）の作品と仮定される理由として、Willcock (1997) 185は (a) cyclic epicsの質の悪さ (cf. Aristot. *Poet.* 1459a30–b17)、(b) Aristarchosがその叙事詩群の作者たちを νεώτεροι と見做している点、(c) 詳細不明に近い Homeros に対して、その作者たちの名と出身地が伝承されている点、(d) 叙事詩圏詩 (Cycle) が既存の *Il.* (と *Od.*) の周囲に位置するとされる構造を挙げている。
- (91) Burgess (2001) 10.
- (92) 特に *ibid.* 52–3 and 211 n. 23は、Janko (1982) の言語に関する統計的数量化の方法論 (Homeros詩の年代を前8世紀とし、他の多くの詩の相対年代を結論付ける) に対しては批判的であり、現存する詩が僅かである上、詩の間で方言、機能、内容等による措辞や形式の違い、更に叙事詩伝承の流動性の点から疑問の余地があるとする。しかし、Janko (1982) 9自身も現在伝わるトロイア叙事詩圏詩は約120行、全体の推定14,500行の中の僅か1%に満たない、また *ibid.* 273 n. 163においては、*Il. Parva* (34行) と *Cypria* (約50行) の措辞が調べられる箇所では大概似ているが、その統計はサンプルが余りに少ないゆえに unreliable と述べ、限界があることを認めている。実際、トロイア叙事詩圏詩を含む統計表は、Janko (1982) 24 Table 3. The dative epithet-system for 'men' (*Cypria*を含む)、172 Table 31. -ης and -αις in the epos (*Cypria*を含む)、187 Table 32. The criteria in shorter pieces over 15 lines (*Cypria*, *Il. Parva*, *Il. Persis*を含む)の3表に過ぎず、調査検討の範囲が限られている。
- (93) Cf. Burgess (2001) 182 (Appendix B: Schematization of R. Cook's Tables), 185–6 (Appendix C: Trojan War Images to 600 B.C.E.). このCookの論文 (R. M. Cook, Art and Epic in Archaic Greece, *Bulletin van de Vereeniging tot Bevordering der Kennis van de Antike Beschaving (BABesch)* 58 (1983) 1–10) は、筆者未見。Cook自身はこの論文の中で (Davies (1989b) 100 n. 64に引用されている)、artから特定の叙事詩が作られた年代や流布した時期を推論することは dangerous であると述べている。他の研究者たちのこうした推論とそれに対する反論については、cf. Burgess (2001) 9 and 196 n. 11. 更に、cf. *ibid.* 43 'Although we should not view the artwork as evidence for specific poems, most of the Trojan War scenes portrayed in early art correspond to episodes in these poems (sc. *Cypria*, *Aethiopis*, *Il. Parva*, and *Il. Persis*).'
- (94) Cf. *ibid.* 35–6, 53–5, 184 (no. 16 (Departure of Patroclus, ca. 630 B.C.), nos. 17–8 (Ajax duels Hector, ca. 625 B.C.), no. 19 (Menelaus fights Hector over Euphorbos, ca. 630–610 B.C.)).
- (95) Cf. e.g. *ibid.* 55 and 212 n. 32; West (1995) 204, 207 '... there is no scenes unequivocally based on the *Iliad* before about 625 ... Of course, this need not mean that the *Iliad* was only around 630; but it is very hard to reconcile with the idea that it had been known and admired above all other poems since 730 or 750'; (2003b) 11 'Vase painters had begun to depict recognizably Iliadic scenes from c. 630.'
- (96) Burgess (2001) 88–90, 127–32, esp. 131–2.
- (97) 前696年にPantaklesがスタディオン走で優勝して以来、前566年までにアテーナイ出身者が幾度も (692, 672, 644, 640 (?), 636, 592, ca. 580–570, ca. 570s, ca. 570s B.C.; cf. Kyle (1993) 104 (*Chronological Chart of Athenian Athletes and Possible Athletes*)) オリュンピア競技会で優勝したことが伝えられており、*ibid.* 20によればこの初期の優勝者は貴族層に属していた。但し、前5世紀においても相変わらず運動選手の殆どが貴族であり (cf. Currie (2005) 126 'athletes in the fifth century were still predominantly aristocrats and were frequently ensconced in the political life of their cities')、アテーナイの場合についても貴族階層は減少したものの、やはり大半富裕層に属していた。Cf. Kyle (1993) 113–8. 因みに、前632 (?) 年のオリュンピア競技会開催中に、前640 (?) 年のオリュンピア競技優勝者Kylonがかつての優勝の榮譽を利用してアテーナイで僭主政を企てており、またこの頃からスポーツ (競技) の場面を描く壺絵が増加する。こうした点から、前6世紀には既にアテーナイ人 (貴族層) が運動競技にかなり精通し、それに対する彼らの関心が高まっていたと考えら

- れる。Cf. *ibid.* 20–1, 111; cf. *id.* (1984) 95 n. 26 ‘Athenian victors in the sixth century were aristocrats seeking glory rather than a livelihood’.
- (98) Plut. *Sol.* 23.3 τῷ δ' Ἰσθμία νικήσαντι δραχμὰς ἑκατὸν ἔταξε δίδοσθαι, τῷ δ' Ὀλυμπιονίκῃ πεντακοσίᾳς; Diog. Laert. 1.55; cf. Kyle (1993) 22 and n. 31. この報酬に関する法はアテナイにおける貨幣制度の普及が前6世紀後半以降とする一般的見方に反するが、元来貴金属の重さによって表現されていた報酬額が、後に貨幣に換算された可能性もある。Cf. Kyle (1984) 94–8, 105, esp. 96–7.
- (99) Cf. Kyle (1993) 52 ‘From the sixth to the fourth centuries the general ceramic evidence reflects a shift in popularity (through black- to red-figure) from horse and chariot scenes to general athletic scenes. Paintings of horsemen decline from 437 examples in black-figure to 287 in red-figure, while scenes of athletes greatly increase from 199 in black to 1371 in red-figure.’
- (100) 後のアテナイにおける市民中心の運動競技の発展に対するSolonの寄与については、cf. Kyle (1984) 105; (1993) 21–2, 29–30. 因みに、Solonは運動競技者を批判したと伝えられており、このことに触れる最古の史家、前1世紀のDiodorosによれば、Solonは拳闘家たち、徒競走の選手たち、また他の選手たちが国家の安全に対して言及に値する程寄与しないと考へた (Diod. Sic. 9.2.5; cf. Diog. Laert. 1.55) という。しかしKyle (1984) 94–5, 103–4は、この批判は確かで (trustworthy) はないと述べている。
- (101) Kyle (1993) 24.
- (102) *Ibid.* 104 (*Chronological Chart of Athenian Athletes and Possible Athletes*), 195–228 (Appendix B: Catalogues of Known and Possible Athenian Athletes) のリストによれば、記録に残っているアテナイ出身の馬術競技者 (実際には馬主ではなく、御者や騎手が出場した) は前592年のオリュンピア競技会の戦車競走優勝者Alkmeon (cf. Hdt. 6.125.5; Isoc. 16.25; Kyle (1993) 112, 157) が最も古く、それ以前には見られない。
- (103) 左右両面の段状のスタンドに坐す観衆の右にΑχιλλεύςの名、左に戦車とΠατρόκλος: Ατλαが見られる。先頭の馬の上に記されている ι]ος、或いは]οςは競技者名であろう。Cf. Lowenstam (1997) 28 and n. 18; Burgess (2001) 81, 222 n. 124. Ἀντίλοχος, Εὐμηλ]οςと読む研究者もいる。Cf. Shapiro (1994) 35; Lowenstam (1997) 28 n. 18. しかし、*Il.* 23巻の戦車競走ではDiomedesが優勝している。
- (104) 戦車競走の5人と審判役のAchilleus (Ηιπ(π)ο[.]ων, Δαμάσιπ(π)ος, Διομέδες, Αὐτομέδων, Ὀλυπ(τ)εύς, Ἀ[χ]ιλ(λ)εύς) を描く。前560年頃のアッティカ黒絵式amphora (Florence 3773) に見られる戦車競走も、Patroklosの葬礼競技のそれを描いたものと考えられている。Cf. Shapiro (1994) 35, 37 (figs. 21, 22).
- (105) Wachter (1991) 96–7, 112 ‘the painter (sc. Kleitias) did not know Homer’s Iliad, at least not book 23, when he painted the vase’ も、この画工がDiomedesの優勝については知っていたが、少なくとも*Il.* 23巻は知らなかったと述べている。
- (106) Cf. e.g. Lowenstam (1992) 168, 182. その他に、別なversionが存在したと説明する研究者たちについては、cf. Burgess (2001) 81–2, 222 n.125. その一人であるSnodgrass (1998) 120は、競技者の数、Achilleusの役割 (審判者)、Diomedesが参加している点から、*Il.* 23巻を反映している可能性がある」と認めるが、より慎重に、‘I personally find this a delicately-balanced case’ と述べ、‘a variant and no doubt post-Homeric version of the race’ の可能性を示唆するに止めている。更には壺絵に見られるΗιπ(π)ο[.]ων, Δαμάσιπ(π)οςの名とこの陶器の注文者の関連を示唆する説もある。例えばLowenstam (1992) 189–91によれば、壺絵の描写は同じ題材を扱う場合においても細部に亘って一致することは殆どなく、口誦詩の優れたパラレルであって、画工は単なる詩人の挿絵画家 (illustrator) ではなく、口誦詩人と同じような関係にある。つまり、口誦詩人が必要に応じ、或いは聴衆の関心に合わせてストーリーの細部を変えていったように、叙事詩の或る場面を描く際には、付加、短縮、潤色、省略、混成 (contamination) するのが常であり、画工Kleitiasも画題を或る状況に合わせて選んだという。壺絵には8個の神話・伝説が描かれているが、PeleusとThetis (Achilleusの両親) の婚礼が主要な絵であることから、LowenstamはKleitiasが結婚式を催す壺の依頼主のために描いた可能性を指摘している。

- (107) Cf. Schefold (1992) 260–1 and figs. 314–5; Burgess (2001) 222 n. 126 ‘an interesting artifact in Basel (ca. 560, *LIMC*, “Achilleus”, no. 492*; BS 1424), which shows athletic contests but no chariot race’. パンアテーナイア祭の再編成 (ca. 566 B.C.) 以降、(アテーナイに限らず) この3種目(拳闘、レスリング、徒競走)は特に一般の市民層に好まれた競技であったことを示唆するとも考えられる。もし制作年代が正しければ、この頃にはPatroklosの葬礼競技の描写が現在のversionに近かった可能性が高い。
- (108) Peliasの葬礼競技会の方がPatroklosのそれよりも好まれた題材であったと見られ、多くの壺絵等に描かれている。Cf. Roller (1981b) 109–11, pls. 19–20, figs. 1–5. 以下はその数例であり、競技種目に付した括弧内は競技の参加者を示す。(1) Stesich. fr.179 *PMG* (**Ἀθλα ἐπὶ Περίῳ*) (b) *θρώϊσκων μὲν ἄρ’ Ἀμφιάραος, ἄκοντι δὲ νίκασεν Μελέαγρος*. (2) 前7世紀末頃の作Kypselosの箱 (Paus. 5.17.9–10) には、2頭立て戦車競走 (Pisos、Astērion、Polydeukes、Admetos、Euphemos)、拳闘 (Admetos、Mopsos)、レスリング (Iason、Peleus)、円盤投げ (Eurybotas)、徒競走 (Melanion、Neotheus、Phalareus、Argeios、Iphiklos) が見られる。(3) 前560年頃のコリントスのAmphiareosのクラテール (cf. Schefold (1992) 194 and fig. 233; Roller (1981b) 110, pl. 19, figs. 1–2) には、4頭立て戦車競走 (Euphemos、Kastor、Admatos、Alastor、Amphiareos、Hippasos)、レスリング (Peleus、Hippalkimos) の模様が描かれている。
- (109) 前注 (108) のStesichorosの作品であろうか。Cf. Roller (1981b) 113, 118.
- (110) Patroklosの葬礼競技については*Il.* 23巻と壺絵の描写の違いが多いが、それ以上にPeliasの葬礼競技の場合も文字によるversionsと壺絵等の描写が異なり、しかも後者の美術作品については、特に個々の種目の点で互いに大きく異なる。Cf. Roller (1981b) 107–8, 113, 116.
- (111) Cf. *ibid.* 107–8 ‘References to games held to honor other Greek heroes are found throughout ancient literature . . . Only two sets of funerary contests, those of Patroklos and those held for Pelias, were illustrated in Greek art, and these were popular for a comparatively short period of time.’
- (112) 3大祭典競技会の再編成が叙事詩の描く運動競技の伝承に関心を引き寄せた可能性については、cf. Roller (1981b) 107–8, 119. 逆に、こうした競技会の発展・普及が詩人の競技描写の創作活動を促した可能性も考えられる。
- (113) ギリシア伝説上の英雄のために催されたという葬礼競技会の伝承は多く、Roller (1981a) 13 n. 1にはAchilleus、Anchises、Oidipus、Pelias等14人、また祭典競技会の起源となったと伝えられる葬礼競技が催された英雄等はPelops (Olympia祭)、Melikertes (Isthmia祭)、Opheltēs (Nemea祭) 等17人が挙げられている。しかし、Roller (1981b) 118によれば不思議なことに汎ギリシア的祭典競技会の起源を形作ると考えられるこうした競技神話伝説は決してギリシア美術のテーマとはならなかった。また、*ibid.* 115はギリシア伝説の葬礼競技は美術表現の長い伝統を持つテーマではなく、むしろ前6世紀初期にギリシア美術に導入されたものであると述べている。
- (114) West (2003b) 11 n. 51.
- (115) Cf. *ibid.* 11.
- (116) Cf. 注 (18). 特に、*Il.* 22.378–94ではAchilleusが将たちにトロイア攻略を促すが、急にPatroklosの葬儀がまだ行われていないことを思い出し、攻撃を思い止まる (*ibid.* 385 ἀλλὰ τί ἢ μοι ταῦτα φίλος διελέξατο θυμός; 「だが全く、どういふ訳で私の心はこんなことを言い出したのか」) 場面は、あたかもトロイア攻略よりも友人の葬儀の方が重要かのような印象を与え、奇異 (Lesky (1967) 75.48 „verwunderlich genug“; cf. Davies (2016) 22) としか思われない。この時点で別な詩人に替わったとする見方 (既に1918年にE. Schwartzが述べている。Cf. West (2003b) 8 n. 35) もあるが、詩人がモデルとなった**Memnonis* から離れたという意見については、cf. Schadewaldt (1951) 169 „Die auflösende Iliaserklärung hat dort, wo Achilleus sich selbst unterbricht und abbiegt, die Fuge zwischen zwei ‘Schichten’ angesetzt: von hier ab dichte ein anderer Dichter weiter. Vortrefflich. Nur, kein ‘Anderer’ dichtet weiter, sondern Homer verläßt an dieser Stelle den Weg der Memnonis, den er bisher verfolgte.“ 更に、a poet’s ‘change of mind’、a planned surprise等の見

- 解やその批判については、cf. Currie (2006) 27 n. 126; (2016) 59–60 n. 129.
- (117) 最近のBurgess、Kullmann、Currie等によるこのWest説に対する反論については、cf. Currie (2016) 60 n. 130 (esp. ‘A mythical tradition passed over by Homer is not necessarily unknown to him . . . West’s construction of a chronogical sequence *Iliad*–**Memnonis*–*Odyssey*–*Aethiopis* . . . imposes greater precision than the subject matter allows: the mythology of Memnon, demonstrably older than the *Odyssey* (4.187–8, 11.522, 24.78, and *Theogony*, 984–5), may be considered simply ‘pre-Homeric’).
- (118) これらの作品の（一般的）年代推定については、cf. Rengakos (2015) 314 ‘It is the *communis opinio* today that the material of the *Aethiopis* is pre-Iliadic, however, the concrete form which this material took in the Cyclic epic known to us is post-Iliadic. Thus, if the *Iliad* is dated back to the first third of the seventh century and the *Odyssey* (which already knows Memnon: 4.188; 11.522) slightly later, then the *Aethiopis* as we know it must belong to the last third of the seventh century.’
- (119) Cf. 注 (15).
- (120) この後の、*Aethiopis*と *Od.* 24.36–92（いわゆる「第二ネキユイア（νέκυια）」）の関係、若い Antilochosが何故Patroklosの葬礼競技において活躍しているのか等の考察・検討については、後続の論考III以下を参照されたい。

【引用文献】

- Allan, W., Arms and the Man: Euphorbus, Hector, and the Death of Patroclus, *CQ* 55 (2005) 1–16.
- Bernabé, A., *Poetae epici Graeci: Testimonia et fragmenta*. Pars 1. Edited by A. Bernabé, 2. Aufl., Leipzig 1996.
- Burgess, J. S., Beyond Neo-analysis: Problems with the Vengeance Theory, *AJPh* 118 (1997) 1–19.
- , *The Tradition of the Trojan War in Homer and the Epic Cycle*, Baltimore/ London 2001.
- Cairns, D. L., ‘Introduction’, in D. L. Cairns (ed.), *Oxford Readings in Homer’s Iliad*, Oxford 2001, 1–56.
- Campbell, M., *A Commentary on Quintus Smyrnaeus, Posthomeric XII (Mnemosyne Suppl. 71)*, Leiden 1981.
- Chantraine, P. et Goube, H., *Homère: Iliade, Chant XXIII, édition, introduction et commentaire, 2^e éd. revue et corrigée* (Érasme 9), Paris 1972.
- Christesen, P., *Olympic Victor Lists and Ancient Greek History*, Cambridge 2007.
- Currie, B. G. F., *Pindar and the Cult of Heroes*, Oxford 2005.
- , ‘Homer and the Early Epic Tradition’, in M. J. Clarke, B. G. F. Currie, and R. O. A. M. Lyne (eds.), *Epic Interactions, Perspectives on Homer, Virgil, and the Epic Tradition Presented to Jasper Griffin by Former Pupils*, Oxford 2006, 1–45.
- , *Homer’s Allusive Art*, Oxford 2016.
- Davies, M. (1989a), *The Epic Cycle*, Bristol 1989.
- (1989b), The Date of the Epic Cycle, *Glotta* 67 (1989) 89–100.
- , *The Greek Epic Cycle*, 2nd edn, Bristol 2001.
- , The *Aethiopis*. Neo-Neoanalysis Reanalyzed (*Hellenic Studies* 71), Cambridge, Mass./ London 2016.
- Davison, J. A., Review of Pestalozzi (1945), *CR* 61 (1947) 29.
- Davison, J. M., *Attic Geometric Workshops* (YCIS 16), New Haven 1961.
- Dodds, E. R., ‘Homer’, in M. Platnauer (ed.), *Fifty Years (and Twelve) of Classical Scholarship*, 2nd edn, Oxford 1968, 1–17, 31–5.

- Dowden, K., Homer's Sense of Text, *JHS* 116 (1996) 47–61.
- Fantuzzi, M. and Tsagalis, C. (eds.), *The Greek Epic Cycle and its Ancient Reception: A Companion*, Cambridge 2015.
- Farrington, F., 'Olympic Victors and the Popularity of the Games in the Imperial Period, Addendum', in T. F. Scanlon (ed.), *Sport in the Greek and Roman Worlds, Vol.1: Early Greece, the Olympics, and Contests*, Oxford 2014, 158–202.
- Gardiner, E. N., *Athletics of the Ancient World*, Oxford 1930 (repr. Chicago 1980).
- Heubeck, A., 'Books XXIII–XXIV', in J. A. Russo, M. Fernández-Galiano, and A. Heubeck, *A Commentary on Homer's Odyssey*, Volume III: *Books XVII–XXIV*, Oxford 1992, 313–418.
- Hölscher, U., Review of Schadewaldt (1951), *Gnomon* 27 (1955) 385–99.
- Janko, R., *Homer, Hesiod, and the Hymns*, Cambridge 1982.
- , *The Iliad: A Commentary*, Vol. IV: *Books 13–16*, Cambridge 1992.
- Jeffery, L. H., *The Local Scripts of Archaic Greece: A Study of the Origin of the Greek Alphabet and Its Development from the Eighth to the Fifth Centuries B.C.*, rev. ed. with a Supplement by A. W. Johnston, Oxford 1990.
- Kakridis, J. T., *Homeric Researches*, Lund 1949.
- Keydell, R., *RE* XXIV (1963) s.v. Quintus von Smyrna, 1271–96.
- Kirk, G. S., *The Songs of Homer*, Cambridge 1962.
- , *The Iliad: A Commentary*, Vol. I: *Books 1–4*, Cambridge 1985.
- Kullmann, W., *Die Quellen der Ilias (Hermes Einzelschrift 14)*, Wiesbaden 1960.
- , Zur Methode der Neoanalyse in der Homerforschung, *WS* 15 (1981) 5–42 = Kullmann (1992) 67–99.
- , „Ergebnisse der motivgeschichtlichen Forschung zu Homer (Neoanalyse)“, in J. Latacz (Hrsg.), *Zweihundert Jahre Homer-Forschung. Rückblick und Ausblick*, Stuttgart/ Leipzig 1991, 425–55 = Kullmann (1992) 100–34.
- , *Homerische Motive*, Stuttgart 1992.
- 呉茂一訳、『イーリアス』上下、平凡社 2003（岩波文庫版三巻本、改版1964年刊の復刻・再編集）。
- （訳）、『オデュッセイア』上下（岩波文庫）、岩波書店 1971–2。
- Kyle, D. G., Solon and Athletics, *Ancient World* 9 (1984) 91–105.
- , *Athletics in Ancient Athens*, 2nd rev. ed. (*Mnemosyne Suppl.* 95), Leiden/ New York/ Köln 1993.
- Leaf, W., *The Iliad*, edited with apparatus criticus, prolegomena, notes, and appendices, I–II, 2nd edn, London 1900–2 (repr. Amsterdam 1971).
- Lee, H. M., *The Program and Schedule of the Ancient Olympic Games (Nikephoros : Beihefte; Bd. 6)*, Hildesheim 2001.
- Lesky, A., *Homerus: Sonderausgaben der Paulyschen Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart 1967 = *RE* Suppl. XI (1968) s.v. Homeros, 687–846.
- Lowenstam, S., The Uses of Vase-Depictions in Homeric Studies, *TAPhA* 122 (1992) 165–98.
- , Talking Vases: The Relationship between the Homeric Poems and Archaic Representations of Epic Myth, *TAPhA* 127 (1997) 21–76.
- Mazon, P., *Introduction à l'Iliade*, avec la collaboration de P. Chantraine, P. Collart et R. Langumier, Paris 1967² (1^{re} éd. 1943).
- Pestalozzi, H., *Die Achilleis als Quelle der Ilias*, Erlenbach/ Zürich 1945.
- Reinhardt, K., *Die Ilias und ihr Dichter*, Göttingen 1961.
- Rengakos, A., 'Aethiopsis', in Fantuzzi and Tsagalis (2015), 306–17.
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary*, Vol. VI: *Books 21–24*, Cambridge 1993.
- Rohde, E., *Psyche: Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen*, 2 Bde. in einem Band,

- Darmstadt 1974 (fotomechanischer Nachdruck der 2. Aufl., Freiburg i.B./ Leipzig/ Tübingen 1898).
- Roller, L.E. (1981a), Funeral Games for Historical Persons, *Stadion* 7 (1981) 1–18.
- (1981b), Funeral Games in Greek Art, *AJA* 85 (1981) 107–19, pls 19–20.
- Schadewaldt, W., „Einblick in die Erfindung der Ilias: Ilias und Memnonis“, in W. Schadewaldt, *Von Homers Welt und Werk*, 2. vermehrte Aufl., Stuttgart 1951, 155–202.
- , *Iliasstudien*, 3. Aufl. Darmstadt 1966.
- Schefold, K., *Gods and Heroes in Late Archaic Greek Art*, trans. A. Griffiths, Cambridge 1992 (orig. pub. in German as *Götter- und Heldensagen der Griechen in der spätarchaischen Kunst*, München 1978).
- Seaford, R., *Reciprocity and Ritual: Homer and Tragedy in the Developing City-State*, Oxford 1994.
- Shapiro, H. A., *Myth into Art: Poet and Painter in Classical Greece*, London/ New York 1994.
- Snodgrass, A., *Homer and the Artists: Text and Picture in Early Greek Art*, Cambridge 1998.
- Vian, F., *Recherches sur les Posthomériques de Quintus de Smyrne*, Paris 1959.
- , *Quintus de Smyrne: La suite d'Homère*, Tome I: *Livres I–IV*, Texte établi et traduit par Francis Vian, Paris 1963.
- , *Quintus de Smyrne: La suite d'Homère*, Tome III: *Livres X–XIV*, Texte établi et traduit par Francis Vian, Paris 1969.
- Wachter, R., The Inscription on the François Vase, *MH* 48 (1991) 86–113.
- Welcker, F. G., *Der epische Cyclus, oder die homerischen Dichter*, II, 2. Aufl., Bonn 1882 (repr. Hildesheim/ New York 1981).
- West, M. L., The Date of the *Iliad*, *MH* 52 (1995) 203–19.
- (2003a), *Greek Epic Fragments from the Seventh to the Fifth Centuries BC*, Cambridge, Mass./ London 2003.
- (2003b), *Iliad and Aethiopis*, *CQ* 53 (2003) 1–14.
- , *The Epic Cycle: A Commentary on the Lost Troy Epics*, Oxford 2013.
- , ‘The formation of the Epic Cycle’, in Fantuzzi and Tsagalis (2015), 96–107.
- Wilamowitz-Moellendorf, U. von, *Die Ilias und Homer*, 2. Aufl., Berlin 1920 (= Berlin/ Zürich/ Dublin 1966³).
- Willcock, M. M., ‘Neoanalysis’, in I. Morris and B. Powell (eds.), *A New Companion to Homer (Mnemosyne Suppl. 163)*, Leiden 1997, 174–89.
- Willis, W.H., Athletic Contests in the Epic, *TAPhA* 72 (1941) 392–417.

《SUMMARY》

The Funeral Games of Patroklos and *Aethiopis*

Yoshikazu KAWASAKI

This paper reconsiders the relation between *Iliad* and *Aethiopis* from a perspective that is different from previous studies by examining whether the *Iliad* is modeled on stories of *Aethiopis*.

1. Three-fourths of all the 18 characters (13 characters), excluding the ones who died and Nestor from the 22 characters who appear in the funeral games in honor of Patroklos, *Iliad* 23.257–897, are included among the 30 warriors of the wooden horse in Quintus Smyrnaeus's *Posthomerica* 12.314–32 (11 participants of the games except two who died and Agamemnon are included among the 30 warriors). Moreover, among these 11 participants, Epeios (a builder of the wooden horse) appears only in the funeral games of Patroklos, while four other participants (Eumelos, Euryalos, Polypoites, and Leonteus) do not play an active role in *Iliad*. This paper focuses on the abovementioned points, by examining the references that Quintus used, and it suggests that the poem (*Aethiopis* ?) used as a source by the poet of the funeral games of Patroklos and the story about the warriors of the wooden horse were originally closely related.

2. This paper examines previous discussions on the chronological relation between the funeral games of Achilles and those of Patroklos, and indicates that Achilles' funeral games were older than Patroklos' funeral games. Furthermore, it suggests the possibility of the latter having been composed around 600 B.C., based on previous research on the linguistic and stylistic analysis of the texts as well as inquiries into the old customs of funeral games and the development of the athletic games in ancient Greece. Because of the abovementioned analysis, this paper considers that the poet of the funeral games of Patroklos borrowed the stories of Achilles, which is related to the wooden horse.

In conclusion, the paper claims that the poet of *Iliad* was influenced by stories of *Aethiopis* composed by Arktinos whose *Iliu Persis* (*Sack of Troy*) depicted the active roles of the warriors of the wooden horse.